



金峰山表参道の古道を辿る

——できるだけ正確に歩いた——

富永 滋

古道の状態は、一般ハイキングコースから廃道に近い部分まで、区間により様々です。熟達登山者のレベルであれば、全区間に渡り危険はないと思います。古道を歩くよう努めた結果、歩測で 26.5km の全長のうち、約四分の三で歩くことができました。古道の上に車道が敷かれたり、完全に消滅して分からなくなったりして、やむを得ず車道を通ったのは、5.6km (21.3%)、舗装車道に限ると 4.1km (15.5%) でした。

——目次——

第一部 経路の推定

- 1 どの道が金峰古道なのか 2
- 2 金峰古道の詳細な道筋 3
- 3 補足1—金桜神社衰退の古道への影響 5
- 4 補足2—南口参道の歴史的推移 7
- 5 補足3—南口参道の鳥居の位置 8
- 6 補足4—御室川付近の道筋 11

第二部 通行記録

- 1 吉沢一ノ鳥居跡～太刀拔岩分岐(上道経由) 14
- 2 吉沢桜橋～太刀拔岩分岐(下道経由) 18
- 3 太刀拔岩分岐～金桜神社下三ノ鳥居 21
- 4 金桜神社下三ノ鳥居～根子坂(猫坂)上 27
- 5 根子坂(猫坂)上～下黒平白雲橋 33
- 6 下黒平白雲橋～龍ノ平 37
- 7 龍ノ平～御小屋沢造林記念碑 42
- 8 御小屋沢造林記念碑～御室小屋跡 46
- 9 御室小屋跡～金峰山 50

- 付図 55

第一部 経路の推定

金峰古道については、遺された資料の少なさから、未だに一部の事実しか明らかになっておらず、不明な点が多い。だが数少ない既知の文献については、研究し尽くされ、多くの論文や成書が発表されている。総論的な解説はそれらの文献に譲るものとし、ここでは今回の古道歩きに直接関係する幾つかの知見のみを整理しておきたい。

古道歩きで関心が持たれるのは、第一にどの道を金峰古道歩きの対象とすべきなのか、第二にその道の正確な位置はどこだったのか、である。第一の点に関しては、歴史的な変遷や、同時期における複数の経路が存在する問題、第二の点に関しては、今日と同じ高精度の地形図がなかった時代の道の位置がどのように推定されるかの問題、といえる。

1 どの道が金峰古道なのか

まず第一の点、すなわちここで歩く対象とする金峰古道をどの道とすべきか、について整理したい。従来、金峰古道の解釈は、金科玉条のごとく、文化十一年(1814)出版の甲斐国志[1,2]を基礎としてきた。金峰参道について記した修験道が盛んだった中世の現存する文書が皆無であるため、やむを得ず聞書中心の国志に頼らざるを得なかったためであろう。しかし近年の、各地に遺された古文書調査や遺跡発掘の成果により、次第に中世修験道の姿が浮かび上がりつつある。弘仁七年(816)もしくは仁寿元年(851)とされる金峰山の開山後、五丈岩下の本宮への参路が次第に開拓された。甲州側からは杣口、西保、万力、塚原、吉沢、亀沢、穂坂、浅尾、江草の九筋、信州側からは黒森口(信州峠を越えいったん甲州の黒森に入る)、川端下口が使われた。最初に開かれたのは、仁寿元年(851)創設の杣口金桜神社から入る琴川口と伝えられる[3]。当時の甲斐は、甲府より東の現在の笛吹市に中心が有り、利便性の高い琴川口が拓かれたと考えられる。この琴川口は現在と異なり、第一期の杣口金桜神社を起点とする峯伝いの経路だったと考えられている。さらに、より厳しい修行のため完全に峰伝いで金峰山へ至る万力金桜神社を起点とする万力口、信仰の拡大に伴い西方から入山しやすい御岳金桜神社を起点とする吉沢口等の南口の諸参路が開かれ、この三筋を軸に脇道が加わり、九筋になったようだ。山本義孝の研究では、南口は吉沢から上道を経て、黒富士、チョキ、八幡山を越えて金峰山に向かう峰通しの経路が正道であり、東口も同様に杣口から、大鳥山、国師岳、鉄山を越えて行くの行者道であるとしている。国志が記す御嶽道は、一般信者が金峰詣でに使う里道であり、行者が修行する本来の金峰古道ではないと説いている[3]。このように、当初行者の修行が中心だった金峰山行は、中世以降一般信者の参詣が急増し、甲斐国の中心甲府から御岳金桜神社を経て黒平の山村へ入り、そこから山道で金峰を目指すルートが定番になった[4]。これが、現在一般に伝えられる金峰古道の表参道である。確かに行者道こそが真の古道と考えられるが、その存在自体まだ証拠が不十分で実態が不明であるため、ここでは甲斐国志に記された一般信者向けの吉沢からの参道を、歩くべき対象の古道としたい。

しかし更に詳しく見ると、歴史的には、表参道とされる南口のルートも様々な変遷があった。国志編纂の時点で、国志に記録された中世の道は山麓部分が既に使われておらず、参道の起点である一ノ鳥居は所在不明になっていた。当時歩かれていたのは、「下道(外道)」と呼ばれる新しいルートであった。その下道も江戸後期には「御岳新道」に取って代わられた。幸いなことに、近年の発掘調査で一ノ鳥居の位置が明らかになったので、ここでは開山以来の一ノ鳥居で始まる「上道」からのルートを辿ることにした。また大正、昭和期の開発による古道の破壊の影響も無視できない。道中の御岳、黒平の各村やその周囲では、幅員4~5mの自動車道建設により、場所によっては昭和期の道ですら辛うじて痕跡を追う程になっている。よってやむを得ずこれらの部分では、漸く車が通行できた昭和期の粗末な車道を古道として追った。国志の簡略な記述で特定しきれない道の詳細な位置については、明治~昭和期の登山記録等

を参考にした。特に高野鷹蔵[5]や荻野音松[6]の明治時代の道の様子が分かる貴重な文献や、昭和初期の道を詳細に記録した原全教の著書[7]は大変参考になった。

2 金峰古道の詳細な道筋

次に第二の点、すなわち文献から推定される金峰古道の正確な位置について、整理しておきたい。道の痕跡がようやく分かる程度の古道歩きにおいては、道の位置の厳密な特定が欠かせないからである。改めて確認すると、いまここで金峰古道としたのは、一ノ鳥居から上道を通り、八王子峠、御岳、根子坂(猫坂)、黒平、龍ノ平、水晶峠、御室(オムロ)小屋を経て五丈岩下の本宮(奥宮)へと登る道である。

出発点の一ノ鳥居は、甲斐市吉沢(キッサワ)地内の亀沢川出合に近い東端、横田で出土したという。厳密な出土位置を示す資料を入手できなかったが、甲斐市の県道101号を山梨県農政部水産技術センター先の鳥居坂下で吉沢方面に右折し約580m地点の道路脇右側田んぼがその場所だとの、地元の方の話がある。一ノ鳥居前の段丘崖は向かって右が高いので、左斜めに登れば約20m上の段丘端に乗って御霊平に達し、御霊若宮を見て尾根伝いに八王子峠へ向かう。御領棚田からの経路は、明治四十三年測図を原図とした昭和二十七年刊行までの地形図の道が、細部の間違いはあるものの、現在痕跡を確認できる限りにおけるおよそ正しい古道の道筋である。この旧版地形図が示す道はかなり正確で、個々の小峰を越したり捲いたりする部分まで、根本的な地形図の歪みを含みおけば正しく表現されている。昭和後期以降の地形図の歩道は、恐らく踏査が甘いためと想像するが、大間違いはないものの細部がしばしば違っている。尾根伝いの鎌倉時代の上道は経路を特定する術もないが、この尾根は所々が畑地跡や植林地になっているので、比較的明瞭な尾根道が残っており、それを古道と見做して追うことが出来る。そこまで尾根を辿ってきた古道だが、732独標を恩賜林界沿いに右捲きする。山間に点在する北仙開拓の人家の一つが古道脇にあり、そこで獅子平から来る旧敷島町の自然観察路に出合う。自然観察路は現在一般に歩かれるハイキングコースで、インターネット上で国土地理院が提供する地理院地図に示される経路である。この先、このハイキングコースを「古道」とする見方があるようだが、完全に一致するのは一部区間だけである。古道とハイキングコースは数百mの間一致していて、782m小峰を右捲きする。尾根を左に乗越した少し先で古道は自然観察路と分かれ、数十mの距離において平行して進む。839独標北西鞍部の太刀拔岩分岐で両者が一瞬出合い、さらに江戸期に歩かれた吉沢からの下道(外道)が合流する。ちなみに外道は大部分が車道化され昔の道が消えてしまったが、この合流直下の九十九折れ部分にはまだ古道の道型が残っている。986独標付近の少し先まで、古道は稜線に絡んで登る。そこで水平に山腹を捲いてきた自然観察路を合わせ、また暫くの間両道は一致する。萬霊塔のある旧羅漢寺分岐を見て八王子峠へ登る。峠へと左斜めに登っていく道筋は、地理院地図にも正しく示されている。八王子権現(現在は、ロープウェイパノラマ台駅前の八雲神社)の石段下を通過し、車道に出る。このあたりが八王子峠と考えられる。八王子権現から八王子坂にかけての古道は、車道化と植林でほぼ消えてしまった。正確な経路は不明だが、現在の車道と極端には違わなかったようだ。ただ御岳下沢への下りの、御岳霊園手前の短い部分にだけ、旧版地形図が示す古道が残っている。御岳町内は、古道と厳密に一致するか分からないが、現在の車道を辿って金桜神社の三ノ鳥居脇を通過する。

御岳沢沿いの古道は、町を抜けた後、堰堤を高捲きする辺りで消滅しているが、概ね現在の車道と同じと考えられ、車道終点の御岳町の水道施設まで遡る。高芝までは、旧版地形図が示す滝尾坂越えの道が古道である。大縮尺のため違いが分かり難いが、昭和後期の地形図にある御岳沢右岸に沿う道は新道である。すなわち水道施設から高芝までは二本の道が並行して存在する。およそ地形図通りに根子坂(猫坂)を越え、月見沢支沢の下りで車道の御岳林道を横切る。御岳林道開通後の地形図では旧道が消去されているが、車道開通後しばらくの間は、近道として旧道も使われていた。ただし旧道は本沢出合付近の険しい箇所を二つの高い橋を架けて渡っているので、旧道と言っても近代に入って作られた道であろうが、これを古道と考えるしかない。燕岩から古道の上に敷かれた車道を辿り、大平川

の手前でまた車道と分かれる。古道は川へ下っては登り返して小尾根を越え、高屋沢沿いに下黒平へ下る。寒沢付近の古道は消えているので車道の白雲橋を渡り下黒平に入る。今も歩道として使われる村落の中を抜ける古道は、大山祇神社下の少彦名命を祀る石碑脇から小窪の右岸を登り、やがて車道の御岳林道に沿って直下を行くようになる。黒平小跡で車道と重なり、そのまま車道で上黒平を通過し、黒戸奈神社先の集落北端にある甲府市森林事務所付近に達する。古道はこの付近で山腹に取り付いていたようだが、折り返して登る御岳林道に切り崩されており、断片状に残る残骸を繋いで登る。仏坂の登りで一度車道を離れるが、鳥居峠頂上手前の車道合流点付近で切り崩され消えている。少し先の鳥居峠の切通を車道で越える。付近一帯の古道は旧版地形図の道とのズレがあるが、図上に示された地形の歪みのためである。峠の先で古道はまた車道を離れて少し下を行くようになり、カクシ窪を渡った先で再び車道に吸収される。車道の龍ノ平橋で精進川を渡るとすぐ、龍ノ平の森林浴広場手前に古い石祠と道標がある。

龍ノ平から山道に入ると、物見三角点(1709.7m)先の作業車道に崩された箇所を除いて、車道の影響がないため古道がよく残っている。右に左にと尾根に絡んで登る荒れた道が古道である。相変わらず旧版図の地形に対する道の位置の描写は正確だが、深山では図そのものの地形歪みが大きくなるため、その分を割り引いて見る必要がある。しばらく尾根の右をトラバースしてきた古道が、国志で物見石とされる物見三角点の直前で、尾根を左に越えて大捲き始める地点が国志にある「檜嶺」であろう。国志では嶺の字を「トウゲ」と読ませている。古道はしばらく尾根の西を捲き続けた後、尾根の右に移ってすぐ御小屋沢を渡る。物見三角点を捲き終わった直後からしばらく、古道は作業用車道に潰されているようだ。御小屋沢直前で車道を離れて沢を渡った先、さきほど通った作業用車道に再会する地点に造林記念碑がある。車道を横切り、旧版図の通り御小屋沢左岸の山腹を登って白平三角点下を通過する。この先しばらく、唐松峠、水晶峠、刈合平の辺りは、資料の少なさと記述の曖昧さ、地形の複雑さのため、古道の位置の確定が難しい。国志では、檜嶺(トウゲ)付近に物見石があり、その先、御小屋沢、姥子祠と七ノ鳥居があり、続いて唐松嶺(トウゲ)があるとするので、唐松峠は御小屋沢と御子ノ沢の間の乗越を指すものと考えられる。この付近の詳細図を初めて示した原全教は、本文で正しく唐松峠の位置を述べたにもかかわらず、惜しいことに付図では誤って御小屋沢手前の1692独標付近とした。そのためか、後続のガイドも唐松峠の位置を誤って説明したものが散見される。また『六ノ鳥居があったと国志が言う唐松峠は、現在判別できない』[7]と述べたのも、七ノ鳥居の誤記であろう。唐松峠を越え、御子ノ沢に達する。唐松峠や御子ノ沢を刈合平とする見解も有り、それについては後述する。御子ノ沢を渡った参道は右股に絡んで黒木の中を登り、水晶峠で小さな尾根を越す。そこから少し下った支尾根上の一地点である1905m地点に、水晶峠の私設表示板が取り付けられている。古来の水晶峠は、明確なある一点でなく御室川と御子ノ沢の中間尾根を越す一帯を指していたようだが、いつしか前述の中途半端な位置に表示が取り付けられたようだ。荒廃が酷い御室川右岸では、御室小屋跡まで新しいピンクテープが古道を無視して取り付けられていたので、今古道の道筋を辿る人は皆無であろう。古道はいまやうっすら道型が残る程度のものでしかないが、「盗掘防止」表示が乱打された一帯から小窪を真っ直ぐ御室川に出合うまで下り、続いて刈合平まで右岸の樹間を縫って遡っている。昭和期までは刈合平で柚口からの東口参道を合わせていたが、今日の東口参道は刈合平に寄らずに御室川を遡るよう変わっている。後述のように、刈合平の位置については異説がある。道は原全教が賽ノ河原と呼んだ小さな白い薙を渡って、御室川の伏流した左股に入り、川伝いに御室小屋まで行く。河原から左岸に上がったところが御室小屋である。

御室小屋から金峰山にかけては、迷うことのない一本道であり、一般登山道でもある。ただし標高が高く、山自体が峻険なので、身体能力に自信がない方は慎重に考えた方が良くかも知れない。初めはトサカの鎖場など岩稜帯を登り、勝手明神の祠からは樹林帯の登り、最後は岩勝ちでやや不明瞭な山稜を尾根伝いに登る。五丈岩の本宮跡の道標で賑やかな山頂の一角に出る。かつて岩の南側の平地には約2.5m四方の本宮と、約5.5m四方の拝殿があったとされる[8]。現在は小さな祠と石灯籠があるのみで、裏側(山頂側)には鳥居が建っている。五丈岩の約100m北東付近が山頂のようだが、三角点も表示板の位置も最高点ではなく、正確な山頂の位置は不明である。

3 補足 1—金桜神社衰退の古道への影響

加えて補足として、古道の道筋に関して特に気になる二、三の点について考えておきたい。一つは金桜神社の衰退による神領縮小の様々な影響についてである。ここで衰退というのは、修験道の最盛期に武田氏の厚い庇護のもと繁栄し信者が武田軍の一角をなしていた戦国時代に比べ、徳川時代には引き続き多くの信者を集めていたとは言え地方の由緒ある一神社に成り下がったという意味である。金峰参道の古文書として、江戸時代に書かれた幾つかの紀行が知られている。しかしそれらは、金峰信仰の最盛期を過ぎてからの後世の旅人が、見たまま聞いたままを気の向くまま記したものである。金桜神社の社記は慶長十三年(1608)の大火で焼失したため古い記録がなく[8]、そのため体系的な知識を得るための、客観的にまとめた資料は非常に少ない。僅かに、甲斐国志(文化十一年、1814)[1,2]、社記・寺記(慶応四年、1868)[8]くらいであろう。だが何れも、一ノ鳥居建立から数百年後が経過し修験道がかつてのような大きな力を失ってから編纂された資料であるため、歴史的事実は不確かな伝承に依っている。さらに編纂当時の状況が併記されているため、記述に一見チグハグな部分が生じている。それでも事実関係をまとめた唯一無二の資料であることは間違いない。

国志や寺記・社記編纂当時、御霊若宮近くの藪の中にあるとされ実態が不明であった一ノ鳥居が、昭和五十九年に発掘され位置が確認された。国志は、荒川を御霊渡場で渡ると神領の南限を示す一ノ鳥居、さらに登るとすぐ御霊平で、そこには御霊若宮があったと記している。甲府から吉沢までの古い道は、山沿いに羽黒を経て行く道と、千塚から荒川沿いに行く道の二本しかない[9]。羽黒には、金峰山開山と同時期の大同二年(807)、千塚から遷祀された古刹・大宮七社明神(羽黒大宮神社の異称)があり、近年の研究では、吉沢口の起点が大宮七社明神であるとの説が有力になりつつある[3,10]。そこを発った信者は、荒川左岸を通り、明治時代までは現在の「美晶堂」という水晶屋の下側を通っていた左岸道から分かれて御霊渡場で荒川を渡り、今は田んぼになっている一ノ鳥居跡に至ったと考えられる。目前の段丘崖の上が御霊平で、そこに現在も御霊若宮の残骸らしき小祠があることから、位置関係を矛盾なく理解できる。

図1. 神域の縮小に伴う鳥居位置の後退
鎌倉期の神域南限は吉沢・旧一ノ鳥居だったが、
江戸期に八王子峠先まで後退
(出典:国土地理院 五万分の一地形図「御岳昇仙峡」)



ところで、国志に記された一ノ鳥居、二ノ鳥居、一本桜、桜大門等の位置は編纂当時のものであり、古来の位置ではない。江戸～昭和の文献に現れる一ノ鳥居、二ノ鳥居も同様である。中世に権勢を誇り武田家の軍勢として活躍した御嶽衆が崇める金桜神社は、かつて広大な領地を有し、その南限が吉沢の一ノ鳥居であった。一ノ鳥居とは、神域への入口の意味である。御嶽衆は徳川時代にも北山筋の警固を担当し一定の権勢を保ったが、神社の領地は縮小され、門前町の御岳から奥、金峰山までが残されるのみとなった。つまり、金桜神社の足元に建つ三ノ鳥居以奥は本来の位置のままだが、一ノ鳥居、二ノ鳥居は、神領の縮小とともに後退せざるを得なかった。本来は神域内であった吉野の山桜を参道沿いに移植した古来の桜大門は、猪狩村、吉沢村に属することになった。明治時代の解説で、猪狩からの御岳新道と八王子峠越えの旧道との合流点である町の入口の分岐が桜大門とされるのは[12]、新たに移設された先の位置であるかも知れないが、詳細は不明である。また明治三十六年に通行した小島烏水は、「御嶽の宿外れにて朽ちたる黒門の建ちたるを見たが、その(註:古道の)名残なり」と記しているが[13]、これが古道の何の門に当たるかは分からない。かつて御嶽の町の入口にあったこの門の存在は、明治四十五年の写真でその様子が分かる[11]。

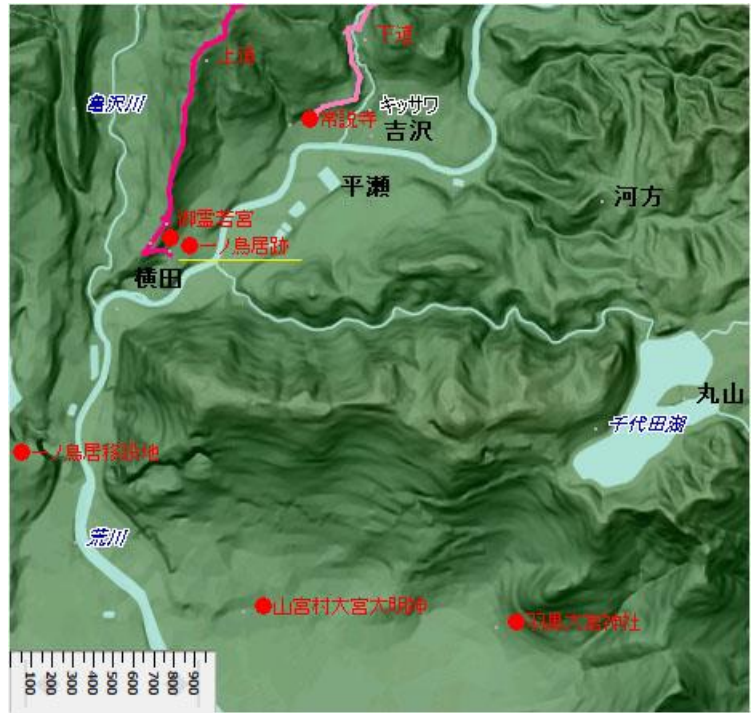


図2. 一ノ鳥居付近の地形（出典：川だけ地形地図）

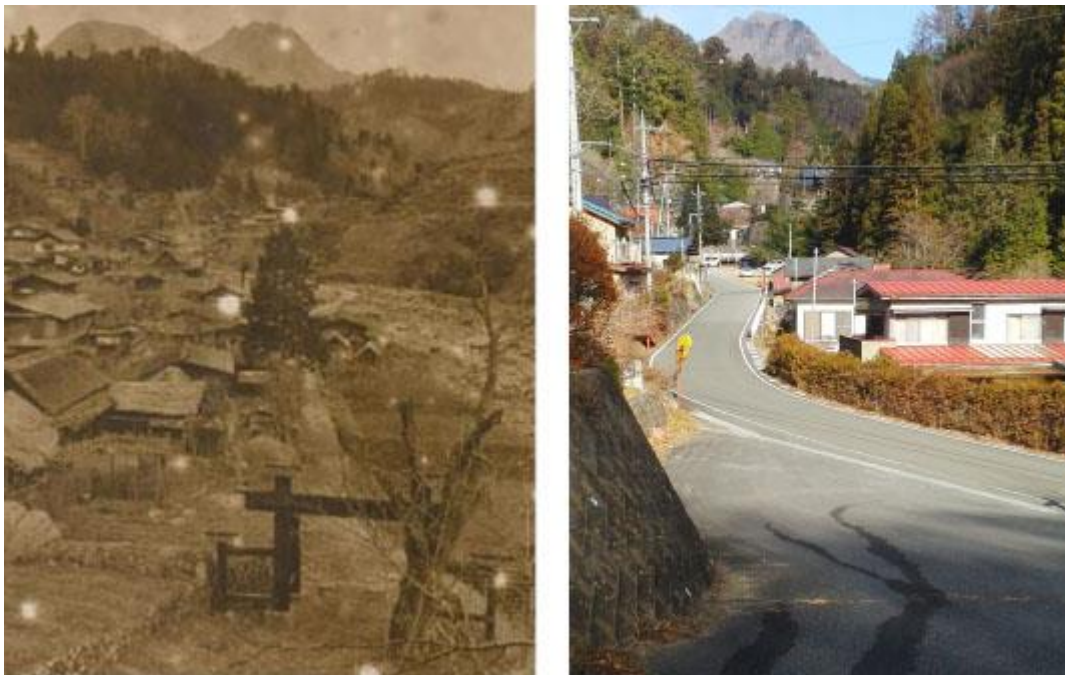


図3. 御岳の桜大門付近(左:明治四十五年以前、右:令和二年)
(左写真出典:甲斐国 御嶽風景[11])

4 補足 2—南口参道の歴史的推移

次に吉沢口を代表とする南口参道の歴史的な移り変わりを整理しておきたい。金峰参道は、元々琴川口や万力口が優勢であったとされる[3,4]。永正十六年(1519)の石和から甲府への遷都により北山筋の入口が重要になり、武田氏と御嶽衆との結びつきが金桜神社の力を強め、吉沢口を正道と言わしめるまでにしたと思われる[2]。吉沢までの道筋も、甲斐の各所から山宮を経て御霊ノ渡しで荒川を渡る道から、江戸後期の文化年間には山宮から荒川左岸を通り吉沢橋で右岸に渡る経路に変わっていた[15]。金峰古道のうち麓から御岳金桜神社までは、特に時代による変化が激しい。上道と呼ばれる伝承上の古来の道は、一ノ鳥居が発掘されるまで長らく具体的な記録や証拠がなく、実用上も忘れられていた。ただ集落に近い部分は畑地として利用されていたので、道そのものは作業道として使われていたのかも知れない。参道の位置に関する最古の文献は江戸時代のもので、吉沢の下道が記録されている。かつて下道沿いには、今は廃村となったが、第二次大戦後に北仙開拓の集落が開かれ、開墾して桑畑となった外道ノ原まで車道が通じていた[16]。この外道ノ原は一本桜とも呼ばれ、ここから桜大門が始まっていたと考えられる。大正末期頃まで道者のための茶屋があったとの話もある[16]。そのすぐ下で合わさる天神平の長潭(ナガトロ)橋からの道は、甲府から昇仙峡へのバスが通うようになって盛んになった脇道である。太刀拔岩付近で古い上道を合わせると、萬霊塔がある羅漢寺入口付近まで、尾根通しの古道と造林作業道のような捲道の二本が並走する。昭和の後期から現在まで、主に捲道の方が使われ、現在は自然観察路となっている。つまり最近の八王子峠越えでは、利用するのは主にハイカーの方であろうが、吉沢からの下道を使わず、長潭橋から外道ノ原を通して一時的に下道を登り、太刀拔岩付近から捲道に入って羅漢寺入口に回るルートが使われるようになっている。八王子峠から御岳までは全て車道化されてしまい、古来の道はほとんど分からなくなっている。八王子坂を下る部分にのみ、僅かに古道が残されている。

この他、八王子峠の山越えを避けて御岳に入る道として、下道とほぼ並行して亀沢川沿いに御岳へ入る亀沢口も使われており、例えば文化六年(1809)に御岳を訪れた渋江長伯[15]はこれを利用している。恐らく一般の旅人は、登山要素の少ない亀沢口を利用していたのではないだろうか。

金峰参道に革命的な変化をもたらしたのが、長田圓右衛門らが拓いた新道であった。地元の寒村、猪狩の住人長田は、甲府へ通行の便のため、多くの私財と膨大な労力を投じ、険しい昇仙峡に道を拓いた。天保五年(1834)に着手し、ようやく同十四年(1843)に完成したという。これ以後、甲府から和田峠、丸山を経て天神平へ下り、昇仙峡、猪狩を経て御岳へ入る路が標準になった。この経路は現在甲府から車で天神森へ入る時の道と、ほぼ同じである。これ以後今日まで、幾度か道の付替はあったものの、殆どの通行者が昇仙峡を経て御岳に入るようになった。

八王子峠越えの御岳旧道は廃れ、すっかり寂れた八王子権現の籠堂は、荒されるもことなく放置されていたという[7]。昭和初期、昇仙峡観光が盛んになると手頃なハイキングコースとして一時的に脚光を浴びたが、八王子峠の山頂へのロープウェイが完成する昭和三十九年以後、ハイカーが弥三郎岳周辺を歩く以外、山越えの旧道を辿って御岳へ入る人は稀である。



図4. 参道の歴史的推移

鎌倉期の上道①は、江戸期に下道②および沢道③になった。②は吉沢橋を渡る利便性、③は厳しい山径を回避する利点があった。江戸末期に昇仙峡を抜ける④新道が開通すると、天神平へのバス路線開始までは甲府から便利な和田峠越えが歩かれた。現在は昇仙峡付近が遊歩道になりバイパスの⑤車道が使われる。
(出典: 国土地理院 五万分の一地形図「御岳昇仙峡」)

5 補足3—南口参道の鳥居の位置

続いて、かつて南口参道にあった古来の鳥居の具体的な位置について分かる範囲で整理してみたい。初期の一ノ鳥居の位置は、吉沢の横田地区、すなわち御霊若宮がある御陵平の段丘崖下の発掘場所と確定された。唯一の鳥居の現物が確認された場所である。鳥居跡には基石が残されているとのことだが[16]、付近には多数の石があり、それには気が付かなかった。国志の桜大門や二ノ鳥居に関する記述は、山川部では登り方向、神社部では下り方向で説明していて紛らわしいのだが、他の資料も合わせ読むと、およそ次のように推定できる。吉沢から下道を登ると、北仙開拓の最後の人家の先で外道坂を一登りし、長潭橋からの道を合わせて広く緩やかな外道ノ原となる。かつて一本桜があったのがここで[16]、さらに九十九折れに登ると、その最中に、付近の高さ約6mの岩の上から三方にこだまする「三聲返し」という場所があると思われる。明治時代の写真に写った景色から[11]、九十九折れの途中にある千田分岐の道標(約790m、現在ここで分かれる道は荒廃)付近と推定できる。ただし、詳細な紀行を記した渋江長伯は、外道を下ってきて、「太鼓岩」(920m圏峰の南を捲く付近)、「山腹の少し平らなる所」、「三聲谷」、「天狗岩(太刀拔岩)」、「虫喰岩」、「九十九折れの坂」、「外道ヶ原」の順に説明しているので[15]、太刀拔岩の少し上である可能性もある。三聲返しの位置としてその付近を図示している資料もある[16]。

なぜこの地点が重要かと言えば、国志では、ここから約2.2km(二十町)の地点を、江戸時代における神領南限、

すなわち当時の一ノ鳥居の位置としているからである。国志は、「三聲返し」近くに「一本桜」があり、そこから一ノ鳥居までの間は桜大門と呼ばれ、金峰山の本山である吉野から移植した桜が植えられていたと伝えており、十三世紀の隆弁僧正の和歌にも歌われている[12]。「三聲返し」を千田分岐の道標地点と仮定すると、歩測で2.2kmの地点は、八雲神社から御岳に向った場合、自然観察路が下福沢に分岐する地点の約300m先となり、江戸時代に神領の境界として一ノ鳥居が立っていた場所としては、あまりにも中途半端な尾根上の一地点である。だがそこからさらに歩測で700mほど進んだ地点の車道脇に、鳥居か何かの沓石のようにも見える不思議な石が唐突に置かれていた。もし三聲返しが前述のように太刀拔岩先とするとその誤差は縮んで4~500mとなるが、この沓石様の遺物の重要性に変わりはない。この地点は、明治七年まで存在した猪狩村と御嶽村の境界に近いので、江戸時代の金桜神社神領が明治元年にそのまま御嶽村へ横滑りしたと考えれば、その南限が江戸時代の一ノ鳥居の位置である。当時の厳密な村界は分からないが、山間部の古い境界が現在まで変わらず続く通例で考えれば、今日の甲府市御岳町の南限が明治時代の御岳村の南限と推測できる。現在の南限は、沓石のような石からさらに御岳方向に約250m進んだ地点、すなわち地形図で甲府市と甲斐市の境界線が八王子峠から御岳への尾根にかかった地点である。昔の測量技術を考えれば、「三聲返し」から2.2kmの地点、沓石様の遺物の発見地点、今日の御岳町南限は、およそ同一地点と見るのが可能であろう。江戸時代は神領の南限とされた一ノ鳥居のあった沓石様の遺物の地点が御嶽村の南限であり、そこに一ノ鳥居が建っていたが、その後の正確な測量で得られた正しい地形図に基づき境界を引き直した結果、御岳町の南限が北へ移動したものと推測される。気になるのは、入念な記述で知られる原全教の紀行が、江戸時代の一ノ鳥居跡の可能性のある沓石様の石について全く触れていないことである。これは憶測になるが、原が通行した昭和初期にはまだ現在の車道はなく、この石はヤブなどに埋もれて分からなくなっていたが、車道の建設時に出てきたものが道路脇に放置されたのではないだろうか。事実は分からないが、そう考えたくるほど、中途半端に車道脇に所在なげに放置されているのである。

国志では、一ノ鳥居を過ぎるとスギやヒノキの多い杉大門と呼ばれる一帯に経つ二ノ鳥居を通り、八王子坂を下としている。一気に谷へと下り始めるのは、沓石様の石から約300m先の地点なので、それまでの短い区間に続けざまに江戸時代の二ノ鳥居が建っていたと思われる。スギやヒノキの様な陽樹が多いということからも、二ノ鳥居があった杉大門が尾根上であることが分かる。原全教は、八王子峠から三十分の所が二ノ鳥居、さらに十分で切通、十分で御岳としている[17]。また二ノ鳥居は「趾あり」と付記してあるので、沓石があったということだ。まず「切通」は、そこから三ノ鳥居まで実歩で十二分だったので、石祠がある約880mの尾根乗越しで間違いない。八王子峠から切通までは山道だった当時の所要時間は現在と異なるはずだが、四十分かかるうち三十分の位置が二ノ鳥居というので、距離で四分の三の地点と考えられる。それは尾根の約950m地点で、下からくる舗装道が未舗装に変わって100m余り登ったところに当たり、それまで水平に尾根上を来た参道がまさに御岳に向け降下を始める地点でもあり、鳥居の位置としてふさわしい感じがする。この付近の古道は車道と微妙に位置がずれていたようで、探してみたが明確な道型は確認できなかった。国志とおよそ同時代の渋江の紀行[15]を歩程と逆順に見た場合も、桜大門から春には見事に咲くと聞く桜の木を目にしつつ眺望の良い尾根道が続き、一ノ鳥居、二ノ鳥居と過ぎると、御岳の町を山から見下ろし、九十九折れの坂を下ると町に入るといっているので、大きな矛盾はない。なお古来の二ノ鳥居は八王子峠付近とされるが、その位置は全く不明である。

三ノ鳥居は、間違いなく神社の下に今も建つ大鳥居である。国志では高さ約10.6m(三丈五尺)とされるが、現在の鳥居は6~7m程度に見える。大鳥居脇を御岳沢に沿って金峰山に向かうのは、今も昔も変わらない。四ノ鳥居は滝尾ノ社脇にあるとの国志の記述から、滝尾坂上の祠の地点にあったと考えられる。五ノ鳥居は根子(ネッコ)坂ノ社脇というので、現在「猫坂」と呼ばれる峠道頂上の植林中にある祠の脇にある沓石地点で間違いなからう。現存する三ノ鳥居を除くと、唯一位置が確実にしかも証拠が残る鳥居跡である。植林される前に書かれた多くの文献が、ここから

の金峰山の素晴らしい展望について述べており、御神体である金峰山の遙拝所の役目を果たしていたことであろう。「根子」の意味について、舞田は、御岳の村から見てすぐその峠道なので、側・傍らを意味する古語の「ネッコ」・「ネキ」から付いた名と考えた[18]。一方、寺記・社記では根子坂ノ社を木根立社としている。「木根立」とは切株や根っこのものであり、まるで木の根のような羊腸たる峠道から付いたとも考えられる。少なくとも、陸地測量部が冠した「猫」は全くの宛字だが、今やそれが定着してしまった。国志は鳥居峠の鳥居嶺ノ社脇に、寺記・社記は午向社に六ノ鳥居があるとするが、現在それらの地名はない。明治時代の文献は鳥居峠としており[5,6]、国志の記述から黒平の先、精進川へと越える峠であることが分かる。後に平賀も鳥居峠の名を用いている[19]。寺記・社記の「午向」とは現代語で南向きのことだが、当時の社殿の向きから付いた名かも知れない。今は車道の切通しとなっていて、昔日の面影はない。国志が姥子ノ祠脇にあったとする七ノ鳥居は、御小屋沢の先で唐松峠の手前にある姥子ノ社の位置が不明であるため、全く分からない。この付近は地形的特徴が乏しく、六ノ鳥居、七ノ鳥居の推定位置や檜峠、唐松峠の位置について、誤記した文献も少なくない。

苧合ノ社の脇とされる八ノ鳥居も、苧合の位置が今ひとつ不確かなため特定し難い。近代の出版物に登場する「刈合平」もまた、高畑棟材や平賀文男はそれを唐松峠の位置とし[19,20]、原全教は昭和八年の記事の付図で唐松峠付近としたが[21]、後年御室川で塩山からの道が出合う地点としており[7]、位置が一定しない。小野幸は御室川説を採用している[14]。またこれらが国志から推測した位置なのか、地元の人が呼ぶ位置なのかも知れない。国志では、苧合の位置を、万力・西保口と琴川口の二筋が吉沢口に出合う地点としている。しかしこのような山中深く、当時の東山梨各方面からの道が具体的にどこを通りどこで合流していたかを特定することは難しい。国志には、苧合の先に御子ノ沢、水晶峠があると取れる記述があり、また苧合の先は森林のため下草はクマザサ程度ともあるとので、苧合を唐松峠か御子ノ沢付近とすると納得がいく。毎年夏草を刈るほどの頻繁な道の整備が必要なさそうなのは、今日では御子ノ沢の先からだが、明治期の高野[5]、大正期の平賀[19]の報告から、当時は唐松峠から御子ノ沢にかけて、水晶峠付近と同じくモミやツガの天然の森だったと知れ、草刈が必要なのはせいぜい御子ノ沢辺りまでだったと思える。一方物見石（檜峠付近）から苧合までは約3.9km（一里）であるともされ、距離を基準にすると御子ノ沢が約3.3km、御室川沿いに出る地点が約4.0km、現在のアコウ平道に出合う地点が約4.2kmであり、御室川付近の方がふさわしい。現在残る最古の詳細な参道の記録は、明治三十九年八月の荻野の記録である[6]。荻野が見た道の分岐状況は、明治四十三年測量の初版地形図と全く同様に、御室川で一本、水晶峠下で一本の脇道があったというので、刈合平が国志の苧合であると示唆される。甲斐国志の編纂から九十年ほどが経過していたとは言え、神領での森林開発が皆無であった当時の状況では、荻野の見た道は国志の当時と変わらぬものであった可能性が高い。このように苧合の位置については国志の記述は整合性を欠いており、八ノ鳥居の位置についても推定困難である。九ノ鳥居が御室小屋の登山口にあったことは、国志に明記されている。

6 補足 4—御室川付近の道筋

最後に、御室川付近の道筋について整理してみる。現在の御岳からの道は、造林記念碑から先は点々とピンクテープが付いているが、特に御室川沿いの部分はほとんど古道を無視して取り付けられているので、古道の道筋の点では参考にならない。記録から詳細に辿れるのは、明治三十九年に登頂した荻野や高野の文献以降となるが[5,6]、明治時代の道はかなりの部分で江戸期の道筋を受け継いでいたものと見られるので、それを古道として考える。初めに昭和初期のものではあるが、最も詳細な記録を残した原全教の記述を見てみよう[7]。水晶峠から下ってきた参道は、まず御室川右岸の密林を進み、原が「刈合平」と呼んだ地点で塩山からの道を合わせ、原が「賽の河原」と呼んだ白い河原に飛び出す。恐らく西から落ちてくる水のない支窪の一つであろう。ただし付近には白い河原が三つあるので、

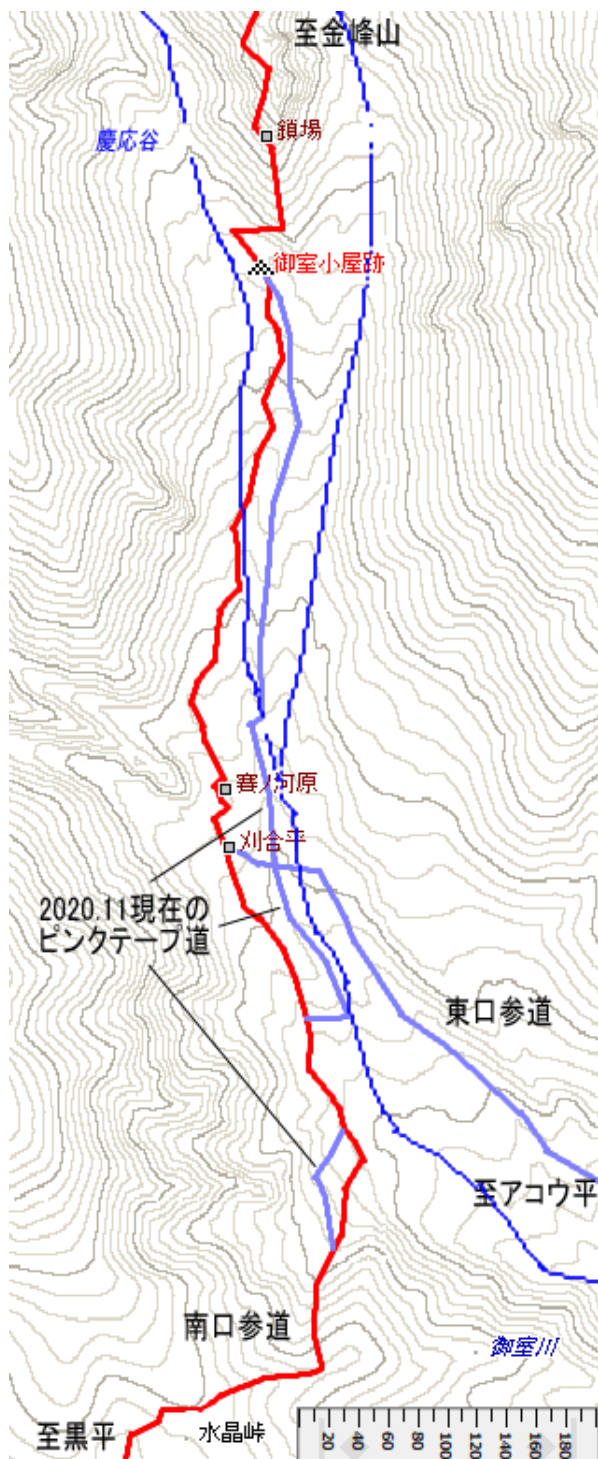


図 5. 御室川付近の道筋

赤線が御岳からの南口参道の推定ルート。2020.11 現在の道(ピンクテープ)はかなり異なっている。また東口参道は、かつて刈合平で南口参道に合流していた。南口参道は御室川(実際は伏流)の左股の河原を通っていたと思われる。

(出典:国土地理院 基盤地図情報 5m標高)

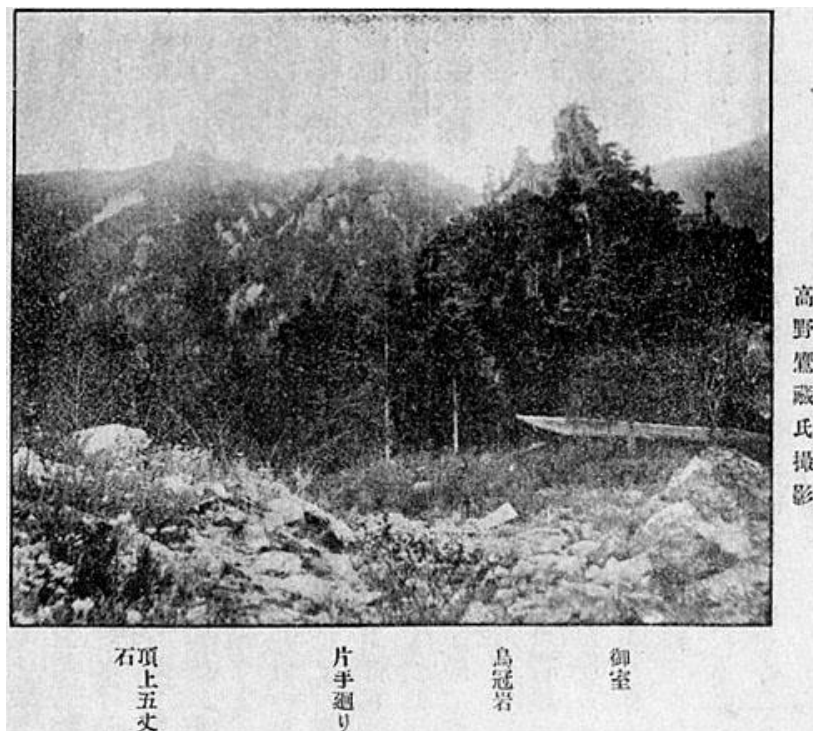


図 6. 御室小屋前の風景(明治三十九年頃)

(出典:「山岳」二年一号[5])

どれが賽の河原かは、人により意見が分かれる。高野[5]や平賀[19]が白い石の河原を二回横切るとするが、歩いてみた古道の推定ルートでも同じであった。原は、水晶峠から「賽の河原」までを七分とした[17]。次いで深い森が覆う小尾根を越し、五分で御室川の白く干上がった御室川の大きな河原に出る。塩山からの道は、刈合平を経ずに伏流した御室川を遡りここで合流することもできとしている。この場所は、御室川の1880m二股の左股の方にあり、1900m付近と思われる。積石を目印に白い石を踏んで川伝いに2~300m遡り、再び森に入るとすぐ御室小屋がある。賽の河原から十分ほどとされる[6,7,17]。御室川の右股・左股の何れを行くかは、河原を北西に行くというので角度的に左股と思われ[17]、明治二十七年に通った木暮[22]、三十六年の小島[13]、三十九年の荻野[6]の何れも、左股を伺わせる記述がある。高野は正面に五丈岩とその下の岩稜帯を見ながら河原を遡り[5]、平賀は河原にある高く屹立した岩の所で五丈岩が見え、そこで二分する河原の右を少し行くと上に御室小屋がある[19]、としているので、確かに左股の状況とよく一致する。写真家でもあった高野の百年近く前の御室の風景を見る限り、左股の河原が参道であった可能性が高いと感じる。

ここに述べた、水晶峠を下ってから御室川の右岸を登り、刈合平で塩山からの東口参道を合わせ、その少し先で御室川の左股に降りて御室小屋まで河原を遡る古道のルートは、昭和四十年にはまだ使われていたようだ[23]。一方で、昭和十七年の著書で、御室小屋から東口参道を下るとき、刈合平経由の右の本道その他、「左の草を踏み倒したような怪しい径」もあり、やがて両者合流して御室川左岸を下るように書かれている。昭和三十四年の記事でも、塩山からの道は「御室小屋の入り口で右から柚口の道が合している。」とされ、現在と同じ御室川の間尾根の森林中を来るように読める。以前利用者が少なかった塩山ルートは恐らく道筋が不安定で複数ルートが存在していたようだが、最終的に現在のルートに落ち着いたらしい。なお現在の御岳・黒平からの道のこの付近でのルートは、推定した古道とほぼ重複しない別のものである。

【参考文献】

- [1]松平定能(編)・小野泉(校)『甲斐国志 卷之七』温故堂(再版)、「卷之二十 山川部第一」1～5頁、明治十六年(初版は文化十一年(1814)、甲府勤番)。
- [2]松平定能(編)・小野泉(校)『甲斐国志 卷之十五』温故堂(再版)、「卷之六十三 神社部第九」8～13頁、明治十六年(初版は文化十一年(1814)、甲府勤番)。
- [3]山本義孝「深山田遺跡と中世修験道」(『深山田遺跡』明野村教育委員会、付録)、平成十四年。
- [4]櫛原功一「第4節 山梨県の山岳信仰遺跡 4 甲府盆地北東部の山岳信仰遺跡」(『山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書』山梨県教育委員会、151～158頁)、平成二十四年。
- [5]高野鷹蔵「秋の金峰山」(『山岳』2巻1号、41～60頁)、明治四十年。
- [6]荻野音松「甲州國司嶽紀行」(『山岳』2巻2号、17～37頁)、明治四十年。
- [7]原全教『奥秩父・続編』朋文堂、昭和十年、「荒川の山と谷 下流」319～330、「金峰参道」330～354、「清川と小森川の峠歩き」532～540頁。
- [8]山梨県立図書館編『甲斐国 社記・寺記 第一巻 神社編』山梨県立図書館、昭和四十二年(初版は慶応四年(1868)、甲州寺社総轄職編)、「窪八幡 御嶽山」1～27頁。
- [9]陸地測量部『二万分一地形図 松嶋村』(明治二十一年測量)、明治二十七年。
- [10]山梨県教育委員会『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第260集 山梨県内中世寺院分布調査報告書』山梨県教育委員会、平成二十一年。
- [11]甲府商工会議所『甲斐国 御嶽風景』甲府商工会議所、明治四十五年、「御嶽村」29頁、「三聲返シノ眺望」35頁。
- [12]松井濤(修)・小野泉(重訂)『甲斐叢記 卷之六(後輯)』温故堂、明治二十四年、「御岳嶺道」24頁、「御岳山金桜社」30～31頁。
- [13]小島烏水『不二山』如山堂書店、明治三十八年、「(十一)甲斐金峰山に登る記」139～159頁。
- [14]小野幸「金峰山御室小屋について」(『山と溪谷』49号、62～66頁)、昭和十三年。
- [15]渋江長伯『官遊紀勝』直曲庵主人(写)、文化十三年(1816)、「遊嶽記 上(巽)」、「遊嶽記 中(坎)」、「遊嶽記下 (艮)」。解説書『渋江長伯著 官遊紀勝 注釈と余話』(功力利夫、私家本、平成十五年)も参考にした。
- [16]山梨県教育委員会『山梨県歴史の道調査報告書 第12集 御嶽道』、昭和六十二年。
- [17]原全教『奥秩父』朋文堂、昭和十七年、五頁付近、「表口(南口)」412～433、「東口」444～453頁。
- [18]舞田一夫『山と集落：奥多摩と奥秩父』集団形星、昭和四十四年、「十賊越え」226～246頁。
- [19]平賀文男『日本南アルプス』博文館、昭和四年、「九月の金峰山」255～264、「金峰より将監まで」298～316頁。
- [20]高畑棟材『山を行く』朋文堂、昭和五年、「五月の金峰山」82～92頁。
- [21]原全教「長城山より琴川へ」(『山小屋』16号、215～219頁)、昭和八年。
- [22]木暮理太郎「秩父の奥山」(『山岳』9巻2号、235～271頁)、大正三年。
- [23]山と溪谷社編『アルパインガイド15 奥秩父』山と溪谷社、昭和四十年、田中文人「金峰山III 一御岳昇仙峡コース」156～158頁。

第二部 通行記録

1 吉沢一ノ鳥居跡～太刀拔岩分岐(上道経由)

発掘された一ノ鳥居は現在、至近の公有地である敷島総合公園に移設されているが、一ノ鳥居の本来の位置である、甲斐市吉沢(キッサワ)地内の田んぼを出発点とした。鳥居跡には基石が残されているとのことだが[16]、付近には石が多数あり認識できなかった。古は荒川の御霊ノ渡しを渡ってきたであろう、付近の民家から来る田んぼの畦道(舗装道)は、すぐ吉沢へ至る荒川右岸車道にT字路で突き当たっていた。目前はヤブに覆われた荒川の段丘崖である。古道は、直登するにはきついこの斜面を斜めに登っていたと見られる。茨に気をつけてヤブに入ると、左上に登る微妙に踏まれた部分があった。笹や灌木を分けてそれを約100mも進むと、一ノ鳥居のあった田んぼのレベルから20mほど上の段丘の端に乗った。段丘上は耕地なのだが、登り着いたその畑地は、目前に建設中の広域農道に遮断され耕作放棄状態だった。折り返すよう右折して上がると、すぐに御霊若宮の小祠があった。明確な道型が残っていないこの区間、古道の道筋についての確実な根拠は得られなかったが、上り下りと一往復して地形や植生をよく観察した結果、このルートが一番もつともらしいと感じられた。途中で見た踏まれた痕跡が鎌倉時代の古道の残骸であるはずはないが、一ノ鳥居から御霊若宮付近にかけては、全て吉沢地区の耕地である。車道ができる前は、崖の上下の耕作地間の移動にその踏跡を使っていたのかも知れない。御霊若宮は金峰詣でが盛んだった頃は立派なお宮だったといい、現在は明治十年の小祠と欠けた狼の石像など数点の遺物だけが道端にひっそり置かれている[16]。付近は広域農道の建設ですっかり変わってしまったが、古い写真に写った風景から現在とほぼ同じ位置にあったと思われる。測ったようにきれいに道路脇に設置されていることや、写真とは微妙に配置が違っていたりするので、道路建設時に多少移動されたのかも知れない。

ここから約100mの間、古道は尾根上に建設された広域農道に潰されてしまったと見られ、それを辿った。左から別の車道が合流すると広域農道は尾根を外れて吉沢へと下り出す。見晴らしの良いその場所には「御領の棚田」の解説板があり、観光地として売り込み中のようなのだ。すぐ左で分かれて尾根に登る農道のような未舗装車道に入ると、すぐに鹿柵があった。それを抜けると未舗装車道は亀沢側へ去っていった。ここからいよいよ古道らしい部分が始まった。古道はピークを捲きつつ常に尾根上に付けられている。緩やかな広葉樹の尾根に、意外と立派なよい歩道が続いていた。道は手入れが良く、ピンクテープが点々と付いていて、予想していたうらぶれた道とは逆に、麓の村々が足下に見えてきて楽しいハイキング気分であった。しばらく歩いて気づいたのだが、かなり周到に倒木除去やピンクテープの手入れがされていたので、地元の甲斐市などが、ハイキングコースとして紹介すべく整備を進めている最中だった可能性がある。KDDIの電波中継所を見ると、石垣で整地した畑地の跡が目につくようになった。古い地形図では、至るところで麓から尾根上まで畑地になっている。車社会になる前は、緩やかな丘のような地形のこの付近では、日当たりの良い尾根上が格好の耕作地だったのだろう。亀沢川沿いの久保からの廃車道が、左後ろから上がってきて横切った。その車道はしばらく、尾根の右側を絡んで登っていたので、それほど遠くない昔に、その車道で行き来しながら尾根上で農作業が行われていたのだろう。その廃車道は再び尾根に乗り、そこで終わっていた。尾根上は多数の倒木で埋まっていたが、全て片付けられ歩きやすかった。578独標の平頂で急に直角に右折したが、テープの誘導が多く迷うことはなかった。植林が現れたり、また畑地跡になったり、自然林の場所もあった。尾根に起伏が出てくると、古道は明らかにそれを避けて捲くようになった。ピンクテープの整備した踏跡は、必ずしも古道の道型を意識せず歩きやすい部分を拓いてあったので、敢えて古道を通ろうとするとヤブや倒木をかき分ける必要があるときもあった。久保から別の廃車道が上がってきて、尾根上を少し南下していた。

地形図に見える金屋四等三角点は、地形的に際立った特徴がないヤブと倒木に覆われた小ピークで、辺りを軽く

探ったが三角点は見つけられなかった。右がヒノキ植林のところで、古道はピークの右を捲いた。山の様子は、畑地の多い緩やかな地形から、植林が多い多少凹凸のある地形に変わり、古道は殆どのピークを捲くようになった。次に道が稜線の左に出る中途半端な地点で、突然道の整備が停止した。地形的にも森林管理的にも特徴のない点で整備停止となっていたのは、作業がまだ進行中のためであろうか。いくら正確に古道を歩くといえ、あまりにも倒木が酷くアスレチックのような状況になる箇所では、遠慮なくその部分を避けて通った。永く歩かれた古道は周囲より凹んでいるため、落葉が溜まって歩き難かった。単に早く楽に行くなら古道の道型を無視して適当に尾根を行くのが良いが、今回はあえて正確に古道を歩いた。小さな凹凸を幾度も繰り返す稜線を右へ左へと捲いて進むうち、やや大きな732独標が現れ、古道はその直前で右のヒノキ植林に沿って捲くようだった。植林による道型の破壊によるものか、かなり細く不明瞭になった。そしてそこから地籍調査のピンクテープが付くようになった。右が恩賜(オンシ)林で、境界杭が頻繁に打たれていた。恩賜林は明治四十四年の設立である。尾根や谷に沿わない捲道が恩賜林界であるということは、少なくとも明治四十四年の境界確定時にここに道があったことを意味する。人里離れた山中では江戸から明治にかけてほぼ変化がなかったはずであり、よって恩賜林界が古道の道筋である可能性が高く、その場合は境界標たる赤杭を追えば良いことになる。トラバース箇所は上から崩れてきた土砂のため道型が消えていることがままあるので、古道の有力な手がかりになる。捲き終わって尾根に戻ったところで境界杭が消えたのは、恩賜林の区域が後退し、この道が境界でなくなったためである。

右前方から車道上がってきて、路上に古い車が廃棄しており、側には二棟の廃屋が見えた。そこを通り過ぎる辺りに表示板があり、獅子平からのハイキングコースである旧敷島町(現甲斐市)自然観察路があいまいに合流した。ここから少しの間、一般コースになるので急に道が良くなった。一時両側が恩賜林になるも、尾根の右捲き部分では恩賜林は右側だけになった。石垣や錆びた一斗缶は、開拓集落の名残であろう。尾根の左を捲くようになっても恩賜林の境界杭は道に沿っていた。

獅子平道を合わせて数百mも行くと小さなガレに突き当たり、そこを急に下る一般コースと分かれ、古道はガレを上巻きし、直進して緩く登り出した。荒れ具合からすると廃道状態だが、廃道としては歩きやすかった。恩賜林の境界標が点在しているので道を失うことはなかった。しかし次第に道型が薄くなり、ついに右上から流入する土砂で消えてしまったので、伐採で荒れた窪の左岸山腹を見当をつけてトラバース気味に登った。稀に見る境界の赤杭も、間隔が長いので十分頼りになるとは言い難かった。荒れた緩斜面をデタラメに行く分には簡単だが、古道を外さないよう神経を集中して歩いた。前方に、下道に出合うはずの峠状地形が見えてくると、それを目標に登った。右から合流するのは、外道ノ原から迂回してすぐそこまで登っている車道から来る作業道で、現在は廃道に近いが、昭和六十二年にはこの道が外道のハイキングコースとして使われていたという[16]。そのすぐ先の峠状地点が、道標が賑やかに立ち並ぶ太刀拔岩の分岐で、向こうから登ってきた外道を合わせた。ここは獅子平、長潭橋・下道、太刀拔岩、パノラマ台・弥三郎岳への四辻を成しているが、一般登山道以外の道を含めると、さらに吉沢・上道、稜線の御岳旧道、外道ノ原からの作業道の三本が合わさる、七辻である。

【時間記録】 一ノ鳥居跡-(10 分)-御領棚田-(1 時間 10 分)-獅子平分岐-(上道経由 20 分)-太刀拔岩分岐 [2020.12.6]



敷島総合公園に保存中の一ノ鳥居



一ノ鳥居があった本来の位置



御霊平へ段丘崖を登る微かな痕跡



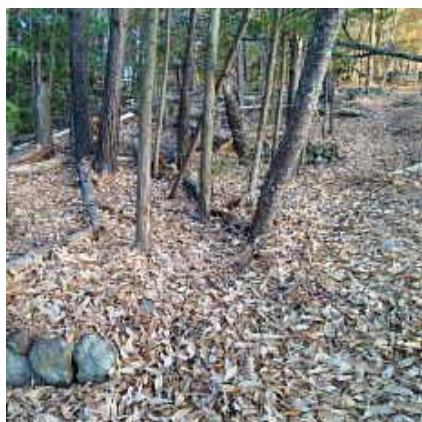
広域農道の縁を登る



広域農道脇の現在の御霊若宮



鹿柵を抜けて上道に取り付く



古道脇で多く見る畑地跡の石積み



道の整備が進み片付いた酷い倒木



自然林の気持ち良いハイク



未整備区間で急に倒木が増えた



恩賜林の境界標に沿う箇所を通過



北仙開拓の廃屋近くで見た廃車群



獅子平からの自然観察路に合流



しばらく恩賜林界沿いの道となる



小崩壊で古道は自然観察路を離れる



境界杭頼みの非常に不明瞭な道に



自然観察路や下道に出合う829m七辻

2 吉沢桜橋～太刀拔岩分岐(下道経由)

下道(外道)は、太刀拔岩下の外道ノ原までが退屈な車道になってしまったので、多くのハイカーは長潭橋から入山して外道ノ原で外道に合流するようになった。だから近年は通して歩く人は稀だったようだが、最近甲斐市が吉沢町内に幾つか道標を立てたので、今後また通行者が増えるかも知れない。主に下道が歩かれた江戸時代、古来の一ノ鳥居は失われていて、当時の参拝者は吉沢橋で荒川を渡り、吉沢から入山していた。現在は甲府からのバス通りが桜橋で荒川を渡っており、そこを起点とした。橋を渡って、吉沢集落を山に向かって真っ直ぐ抜け、Z字に山腹に取り付いた。その二つ目の角で常説寺からの道を合わせ、農業用の細い車道で、吉沢川右岸のヤブっぽい雑木林を進んだ。最近立てた真新しい「日本遺産・御嶽古道」の表示が、迷いやすい村内作業道の分岐のたびに付いていた。小さな橋で吉沢川を左岸に渡ると、少し登って別の車道に合流した。この舗装道を延々と奥へと辿るのである。この舗装道が古道とは信じがたいが、明治二十一年測量の最古の地形図[9]でも現在の車道と同じ位置であることから、古道の上に敷かれた車道と考えられる。第二次大戦後に北仙開拓の集落が出来たことで整備されたという[16]。同じ資料に、御岳発電所建設に伴う鋼管輸送を担ったともあったが、御岳沢左岸にあった発電所関連の道路がこれだとは、地理的に納得できない。高町集落あたりの話と混同しているのではなかろうか。一方、この谷の右岸に荒廃しつつも確りした歩道跡が続き、その一部は恩賜林の境界とも一致することも確認した。どちらが古道であったか、今となっては判断しようがなかった。例の「日本遺産」の表示板を見て、鹿柵を抜けると開拓集落跡に入った。畑跡や道路跡のみが寂しく残っていた。右側が伐採され禿山になった辺りで農機具を見たので、一部はまだ耕作しているのかもしれない。背後の山が風避けとなった南向きの暖かい谷で、吹きさらしの麓より良い土地のように見えた。一箇所だけ作業場か資材置場で使われている敷地があり、飼犬に酷く吠えられた。植林が出てくると、谷が二股になり、一軒の廃屋があった。この奥の広範囲に点在する人家が北仙開拓の廃村で、現在は地図からも抹消されている。すぐに、上道で見た尾根近くの廃屋へ向かう未舗装道が分かれた。車道が簡易舗装になった。そこから約300m先が最終人家である。何棟かの建物があり、恐らく二世帯あるうちの一方は、住んでいるか分からないが作業場所などとしてまだ使われているように見えた。

簡易舗装が終わり、農業用の軽トラックがやっと通るくらいの細い未舗装の車道になった。相変わらず広く緩い谷を詰めると、前方が高さ2～30mの急斜面になり、車道は左から折り返し登っていた。渋江長伯が外道坂と呼んだ急坂である[15]。車道造成で分岐点が潰れているが、溝状になった明らかな古道の道型がそこを直登していた。僅か50mほどの長さだが、下道で初めて見る古い道型である。古道は回り込んできた車道に吸収されてしまい、以後しばらく、再び車道に吞まれて痕跡は見られなかった。坂を登り切ると尾根状地形となって道標があり、長潭橋からのハイキングコースが合流した。

緩やかな尾根上は一面開拓時代の桑畑跡で、緩やかで平らな一帯だった。相変わらずの未舗装車道だが、道標やマーキングの整備が格段に良くなった。やがて山裾のただ広い野原のような場所に達した。ここが渋江が言う外道ノ原であろう。長らく耕作放棄された野原のような土地である。尾根の上へ登る作業車道が左に分かれるが、何しろ真っ平な荒地なのでその道を知らないと感じかないかも知れない。いま来た車道も痕跡が薄くなりがちで、左に緩く曲がる部分に来ると、ハイキングコースのマーキングは古道を無視して直線的に進むようになっていた。誰が取り付けたものか古い未舗装車道を兼ねる古道の痕跡にもピンクテープが付いていたが、この付近は古道が恩賜林界になっているので、境界標を辿っていけば自然と古道を辿ることができる。いよいよ斜面が急になるところで開拓地が終わり、それと共に車道跡も終わった。古道はようやくそれらしい雰囲気になり、深い溝を刻みながら、斜め左にトラバースして登っていた。永年の倒木が積もって酷い荒れようだが、道型はまだ残っていた。右にカーブを切ると直進してきたハイキングコースを合わせて明瞭な道になり、電光型にどんどん登った。依然倒木は多いがマーキングが確りしているので心配なかった。この九十九折れの途中、790m付近の道標で千田への古い道が分かれるが、倒木に埋もれて気付

き難くなっていた。この辺りを三聲返しと推測するが、確かなことは分からない。登るに従い、後方の眺めが開けるのが楽しかった。渋江が「虫喰岩」と評した面白い穴の開いた岩も、二百年前とかかわらず右上の岩壁に刻まれていた。倒木を潜りながら、約十回の折返しで65mほどの高さを登った峠状が太刀拔岩分岐であり、ここで上道と合流した。

【時間記録】 吉沢桜橋-(40分)-北仙開拓最終人家-(10分)-長潭橋分岐-(15分)-太刀拔岩分岐 [2020.12.20]



吉沢の常説寺近くを通過して古道に入る



観光用の立札が設置されている



車道化されるも静かで雰囲気が良い



人も車も鹿柵を抜けて進む



廃村の開拓集落で唯一現役の作業場



廃屋が点在する北仙開拓



行けども車道が続く



開拓村の最奥の集落付近



廃車道化した車道がなお続く



外道坂の登りは短区間の古道が残る



平原に戻った外道ノ原の畑地跡



ハイキングコースと古道の分かれ



一列の置石が耕地の境界



倒木で荒れた古道



ハイキング道が合流して良い道に



三聲返し付近の分岐道標



二百余年前の渋江長伯も見た虫喰岩



すぐ上で上道に出会う

3 太刀拔岩分岐～金桜神社下三ノ鳥居

獅子平から来てパノラマ台へ水平に向かう自然観察路に入らず、引き続き古道を進んだ。道の区分としては廃道であろうが、約1m(三、四尺)という道幅は江戸時代に通行した渋江が報じたものと変わらず[15]、熟練した登山者であれば十分通行できるものであった。平坦で不明瞭な尾根上の地形のため古道は一時不明瞭になるが、まず少し尾根を辿り、次に尾根の左を緩い窪状で回り込み、西へ出る支尾根を越えたらトラバース気味に尾根に戻って乗越し、一段上の峠状(853m)に出た。この間、一部だが明らかな道型が残っていた。この辺りの旧道は数十年前まで使われていたらしく、廃道としては歩きやすかった。そこから溝状の古道は尾根に絡んで登るが、落葉や石が溜まって相当歩き難く、ただ通るだけなら右の植林地を折り返し登るサブルートの方が楽で歩きやすい状態だった。872mで両者が合流、その先の929m峰の南を捲きながら次第に高度を上げた。荒れていても道型は明瞭で、時々恩賜林界を横切る地点で境界杭を見た。910mまで高度を上げると、弥三郎岳直前まで道はほぼ水平になった。尾根を乗越して左に移る地点は、尾根上の倒木で曖昧になっていた。やや下り気味に小尾根二つを捲きながらトラバースすると、次の窪状ですぐ下を並走する自然観察路が目に入った。急な山腹に行く古道は土砂に埋もれて少しずつ不明になって消えてしまい、数m下の自然観察路に移ることを余儀なくされた。この辺りが自然観察路との合流点だが、明確な一地点ではないため、八王子峠から逆コースを下ってきた場合は、厳密に地形図を読んで分岐を判断することになる。

古道と合流した自然観察路は流れ込んだ土砂で細くなっていたが、窪状地形を通過するとすぐ古道らしい、やや抉れた落ち着いた道になった。ここから暫くは、古道と自然観察路との重複区間である。俄然歩きやすくなったトラバース道を水平に飛ばすと、尾根に乗る直前の道標で白砂山への道を分けた。直後に尾根に乗った所に萬霊塔の破片があり、鞍掛岩が遠望された。旧羅漢寺への分岐である。文化六年(1809)に通った渋江によると、萬霊塔から寺へ向かうと寺門があったという。寺には数人の僧がいたと云い、その一人に奇岩や架橋が連なる山内を案内させた。社記・寺記によると、慶安四年(1651)の火事で全焼したがその後再建され、幕府御役所からの高札を得たともしており、慶應四年(1868)に社記・寺記編集用の報告を上げている[24]。文化十一年(1814)編纂の国志もまた、寺が山中にあり、近隣三十村を托鉢に回っているとしている[25]。このように羅漢寺は少なくとも江戸末期近くまで確かに存続したとの記録があり、大正九年に昇仙峡の現在の位置に移されたとされる[16]。昭和初期に原全教が見たときには、現存の位置に亜鉛引鉄板葺の粗末なお堂と納屋があったというので[7]、その時点では実質的に廃寺であったのだろう。ウィキペディアの「慶安4年(1651年)3月の火災で焼失して廃寺(羅漢寺廃寺)となり現在地に移転したと考えられている」の記述は間違いで、十九世紀の諸文献を無視した誤った考えに基づいているようだ。八王子峠に向かって、御岳までで随一の100m近い登りとなった。道の整備はよく、九十九折れを入れて歩きやすかった。パノラマ台駅(ロープウェイ頂上)下を斜めに登り、八王子権現(八雲神社)の石段下に出た。今は裏参道のように見えるが、渋江が歩いたときはここが正面だったことが著書の挿絵で分かる[15]。吉沢・猪狩界の乗越しでもあるこの地点は金桜神社までの最高点でもあるので、ここが八王子峠と思われる。休日は観光客で賑やかな場所である。人工的に整地し拡張された山頂に新しい社殿が立つが、昔は石段上に見える鳥居の左側にあった。拝殿裏の大きな石祠は、多少移動したかもしれないが昔のままに違いない。現在の表参道右側には、付近から移設された宝暦十三年(1763)の道標があり、「左是よりみたけ社参道」と記してある。では右の道は何かといえば、八王子権現は麓の猪狩村の氏神であるため猪狩への道も古くからあり、恐らく道標はその分岐点に立っていたものと思われる。

八王子峠の八雲神社へは御岳から車道が通じている。何度も訪れ歩いてみたが、特に八王子峠から御岳下沢右岸尾根の石祠の乗越までは、尾根上の緩やかな地形と、古道にほぼ重複する経路で拓かれた車道建設とにより、古道と断言できるほどの明確な道型は認められなかった。道であったかも知れない部分的な痕跡や、地形的に道があったと推測される箇所など、根拠の弱い推定を基に古道として歩いた部分も少なくなかった。明治四十三年測図の地形図は[26]、地形の歪みや間違いがあっても踏査が確りしていたためであろうか、道の描写は正確であり、歩く際の参考

になった。八雲神社先の下福沢分岐から、山腹を強く削って拓かれた車道に対し、古道は掘削する必要がない尾根筋近くの緩やかな部分を通過していたと推測された。地形的に古道と推測される部分は、緩やかで大変歩きやすいものの、一部の植林作業道らしきを除いては、明らかな道型は残っていなかった。付近は植林地が多く、幾つもの作業用の歩道や車道が設置され、古道の判別を一層困難にしていた。車道が極小の突起を左右に捲きながらほぼ尾根上を行く部分は、古道を潰して車道が敷かれたとも想像され、やむを得ずそのまま車道を辿った。一帯で随一のピークである1019m小峰(地形図では1030m圏)を車道を使って西から捲くと、前方が開けて右に緩い谷が広がり、右に古道らしい痕跡が分かれていた。この地点の右側の道路脇に、古い杓石が放置されていた。鳥獣保護区の看板があり、車道が左に曲がった後すぐ右に曲がる部分である。目測三十数cm四方の石に約8cm四方の穴が開いていた。江戸時代の神領南限に近い位置と考えられるここで見たこの古い遺物は、江戸後期の新たな一ノ鳥居の杓石である可能性が考えられる。試しに右へ分かれる古道を辿ってみると、御岳沢の方向へとどんどん下っていた。また、下らずに尾根を右に絡んで捲くような形跡もあったが、途中で荒廃し、道の気配はほぼ消えてしまった。だが構わず捲き進むと、尾根の芯に戻った辺りの森林中で墓標のような遺物を見た。杓石様の遺物から約200mの位置である。文字は



図7. 八雲神社、下福沢分岐付近の古道の推定位置

(出典:陸地測量部 五万分一地形図「塩山」[26](左)、国土地理院 基盤地図情報 5m標高(右))

長年風雨に晒され掠れて読めなかったが、二引両紋が見て取れた。この家紋は多くの武家に採用されたため、家系を特定することはできない。ちなみにウィキペディアではこの紋を小田切の家紋とするが、その記事の著者が引いた原著で分かるように[27]、小田切の代表的な家紋とは考えられない。ただ小田切は、地元の甲斐市でよくある姓であり、御岳衆にも見られるものであるから、一概に否定はできず、小田切のものであるかも知れない。

一方沓石様の遺物から車道によって明治期の地形図どおり尾根の左を捲いて来ると、この墓石のやや下を左捲きで通過する。そしてすぐ、車道はほんの瞬尾根に乗る。沓石様の遺物からここまで、旧版地形図は尾根を左捲き、古道の断片的な道型では右捲きとなるが、どちらが実際の古道であるかは分からなかった。また尾根に乗った地点は、



図 8. 八王子坂付近の古道の推定位置

(出典:陸地測量部 五万分一地形図「塩山」[26](左)、国土地理院 基盤地図情報 5m標高(右))

現在の甲府市御岳町の南限である。先の杓石様の遺物が、江戸時代に神域の南限に建っていた一ノ鳥居のものとすると、辻褄が合うという根拠である。複雑な地形のこの尾根で、200mばかりのズレが発生しても不思議ではない。

御岳町界から、車道は再び尾根左の山腹をぐんぐん下ってやがて舗装道になるが、明治期の地形図が示す古道は尾根上かむしろ東側を進んでいる。実際に尾根上の古道があったと思われる辺りを歩くと、古道として申し分ない地形であったが、緩やかな尾根上もしくは東側のやや荒れた森には、多少踏まれた感はあるけれども明確な道の痕跡は残っていなかった。原全教が二ノ鳥居の杓石を見たとするのはこの辺りと思われるが[17]、二、三度歩いた程度では見つけられなかった。尾根は930m付近の小さい平らな場所から、谷に向かって急に下り出していた。車道が舗装道になる地点のすぐ脇である。現在は灌木で展望が利かないが、江戸時代に渋江長伯が描いた二ノ鳥居付近の少し下から見た御岳の町の風景を見ると、水墨画のように強調された地形を割り引いてみれば、八王子坂を下る参道の様子からこの辺で描かれたと推測される[15]。渋江が記した九十九折の坂に該当する急な場所は他にないので、この標高差20mばかりの崖状の部分がそれであろうか。今ある車道東側の窪状地形の部分であり、ヤブの中の滑りやすい地形に道型的な雰囲気が見られた。周辺の斜面には他に歩かれた痕跡もなかったことから、古道はここを下っていたと思われる。今は登り難いほどよく滑る斜面なので、長年のうちに古道はすっかり洗い流されてしまったのかも知れない。谷は伐採跡の緩い灌木の斜面となった。作業道の痕跡らしきが多数あり古道と断じる根拠を見つけれず、古道だったかも知れない作業道の残骸を繋いで、緩く斜めに下った。やがて左上から下ってきた舗装車道に自然と吸収され、車道を少し下ると、そこが御岳下沢への乗越であった。山側の擁壁が途切れて左の支尾根を乗越せる地点なのですぐに分かった。原全教が「切通」とした所であろう[17]。ちょうど切り通した部分に非常に古い数段の小さな石段があり、祠が祀られていた。

古道がここで支尾根を越えて御岳へと下るのは、旧版地形図の通りである。一瞬山側へ下るとすぐ折り返して斜めに急下、だが回り込んで来た車道に吞まれて古道は消えてしまった。しかしその十数m先で、再び反対方向に向かう古道が車道から分かれたので、ちょうど折り返す部分が車道の下敷きになったようだ。ヤブっぽい荒れた道を下ると、最後は御岳霊園の造成により切り崩され、霊園内の作業道になり、折り返して再度車道に合流した。ここからは御岳集落内に入るので古道を探すことは困難である。車道を下って御岳下沢の橋を渡ると人家が見えてきた。昇仙峡から来る県道に出合う直前、一直線に並ぶ村の家屋の奥に聳える金桜神社を見通す場所があり、御嶽千軒と言われた江戸時代の賑わいが忍ばれた。しかし明治五年の修験禁止令で、金峰山と金桜神社が大きな打撃を受けたことは間違いないだろう。明治期には参拝者や観光客相手に細々と営業する僅か数軒の宿を残すだけになったという。明治末期の写真には、門前町の入口に当たるこの場所に立つ栄華を伝える古い鳥居が写っている(図3)。観光客の車に追い越されながら広い県道を緩く登った金桜神社入口に、堂々たる大鳥居があった。門前町の終わりに高さ10m余りの三ノ鳥居があったというので、恐らく真新しいこの鳥居がそれに相当するものであろう。神社は266段の石段を上ったところにあるが、見ているとこれを登る参拝客は稀で、社殿脇まで車で乗り付ける人が多いようだった。

【時間記録】 太刀拔岩分岐-(20分)-自然観察路合流-(15分)-八雲神社-(50分)-小祠の切通-(5分)-御岳霊園-(7分)-金桜神社下三ノ鳥居 [2020.12.6, 2021.12.20, 2021.2.23]



尾根に絡んで登る古道



数十年分の荒廃でも道型は分かる



境界標を見て尾根の左に移る



捲いてきた自然観察路と合流して進む



倒れた萬霊塔のある羅漢寺入口



八雲神社下で八王子峠を越す



神社内に移設保存された古道標



神社からは車道化され古道が分かり難い



尾根上の古道と推測する部分



平坦なため道型が見えず確証がない



新・一ノ鳥居の沓石と推測する遺物



車道近くの森の中の古い墓石様の遺物



二引両紋は御岳衆のものか



八王子坂を急下するこれが道型か



伐採跡は作業道と古道が判別困難



小祠の切通で古道に入る



意外と明瞭な道が御岳下沢へ下る



御岳霊園の取付道で車道に合流



金桜神社三ノ鳥居脇の道が金峰へと続く

4 金桜神社下三ノ鳥居～根子坂(猫坂)上

甲斐国志の当時と変わらず、鳥居の東から御岳沢を左岸に渡り、集落内の細く急な車道を登り始めた。対岸の川沿いに元禄十一年(1698)の三界万霊塔を見た[16]。もともと川の中の石の上にあったというが、河川の改修で岸に移ったらしい。前方に大堰堤が現れると車道は大高巻きで越え、そのまま川の10mほど上の植林中を進んだ。昭和三十七年の空中写真では[28]、現在の車道と同じ位置に道があり、現在植林になっている道の川側は畑地になっている。さらに急流で水害の恐れがある御岳沢近くに参道を付ける可能性は低いと思われるので、古くから道の位置は、堰堤高捲き箇所以外は現在の車道と同じだったと推測される。十分ほど歩いて右岸に渡り返したところが車道終点で、対岸は御岳町の水道施設である。車道の左側、御岳沢の右岸に入る小窪の出合近くのヤブやゴミに紛れて、損壊した幾つもの墓石があった。寛延四年(1752)、享和元年(1801)などの文字が辛うじて読み取れた。いずれも金峰参詣で御岳が賑わっていた頃のものである。中では新しい方の墓石には、文久元年(1862)、明治十三年と刻まれ、「先祖代々神霊」とあるので、遠方に越したか絶家した住人のものである。

ここから暫くは、古道がよく残った区間である。入口に、「この先、危険箇所多数の為一般の通行を禁止します。」と甲府市道路河川課の割と新しい看板とバリケードがあった。この看板はある意味紛らわしく、この先江戸時代以前からの古道と後に拓かれた古い市道とが並走する部分があり、危険箇所が生じた古い市道の通行を一般市民が通行しないよう管理者である甲府市が禁じているということと思われた。かつて馬背で荷を運んだという古道は牛馬道仕様(約1.8m幅)で歩きやすく、深い落葉を蹴るように分けながらどんどん進んだ。並走する電柱は、この奥の小屋への電力供給用のものらしい。

100m強を進んだ辺りで、そのまま御岳沢の右岸高みを直進する甲府市道らしき山道と、折返して高度を上げる道との分岐が現れた。どちらも、山仕事などで僅かに歩かれる程度に見えたが、幅があり道型が確りした折返し登る道の方が古道である。文献にある瀧尾坂と呼ばれる峠越えがこの登りに当たり、比較的新しいものでは、昭和四十年に山村民俗の会の舞田一夫が越えた記録がある[18]。明治期に通った高野鷹蔵は地元の案内人に「瀧ノ尾坂」と聞いたが[5]、一方高畑は国志が「瀧尾坂」と記すのを承知の上ここをブナ坂と呼んだので[20]、当時の地元ではその呼び方があったのかも知れない。瀧尾とは瀧の辺りに落ちる尾根という意味であり、古道は急流となる御岳沢の瀧場を避け、そこを態々大きく高捲いていた。倒木や落石で多少荒れ気味だったが、広く明瞭な道がヒノキ植林に続いた。かつて柵があったらしい木杭跡を見て、大きな九十九折れで高度を上げると、明るい雑木林になった。相当年季が入った補強材を渡ると、峠の頂上、瀧尾坂上である。このさき北側が全て植林であるのに対し、南は明るく開けていた。道の左にある大きな石祠が、国志に言う瀧尾ノ社のようだ。原全教が「四の鳥居の礎石」とした石は、ただの石のようも見えたが、見方によってはそう見えるのかも知れない。

植林を少し下ると、古道らしく石垣で普請した所があったが、崩れた土砂で少し細くなっていた。道の左側に置かれた粗末な墓石か小石碑に、明和、安永のような文字が辛うじて読み取れた。それぞれ1764～1772、1772～1781年と、二百数十年前のものである。緩い下りを進むと、沢沿いに登ってきた植林中の微かな踏跡を右から合わせ、すぐに小沢に掛かる山中に不似合いな鋼製の橋梁を渡った。この辺りが高芝で、昭和初期頃まで一軒の家があったところだ[7]。左から合する江草口の古道[1]は、微かに山道の気配を感じるほどでしかなかった。



三百年以上経つ御岳沢の三界萬霊塔



植林地を車道化された道で登る



水道施設付近右岸支沢の荒れた墓所



御岳町の水道施設から漸く山道になる



市道の危険箇所を知らせる表示



登山道と化した市道に電柱が沿う



市道と分かれた古道は滝尾坂を登る



かつて四ノ鳥居があった滝尾ノ社



山中で見た江戸中期の墓標のような石



高芝で市道を合わせ小沢を渡る

ここでいったん歩みを止めて、御岳沢沿いの甲府市道らしき山道について触れておきたい。水道施設がある車道終点を過ぎてすぐの分岐を沢沿いに行くのが、高芝の橋の直前で合流したその山道である。市の立看板にある一般市民やハイカー向けの「危険」表示のとおり、確かにどなたにでもお勧めできるものではない。熟達した登山者であれば登山路として十分通行できる程度の道である。沢沿いのこの道ができた時期や経緯は不明だが、大変な労力を掛け岩壁を穿って作られた人工的な短絡路である。黒平まで車道がなかった頃、瀧尾坂を登らずとも沢沿いに通れる歩道として拓かれた道のような。黒平の藤原一郎氏のお話では、既に子供の頃にはあった道で、人は沢沿いの短絡路を、荷を積んだ馬は旧来の瀧尾坂を通っていたという。氏は昭和三十年代後半まで使われていたとしているので、三十八年の野猿谷林道開通までは断崖を通るこの道が使われていたようだ。以前から開通していた御岳林道は遠回りなので、案内記事もこの道を勧めていた[29]。昭和四年に御岳から猫坂を登った原全教は、瀧尾坂の道のみを解説しており[7,30]、それ以前の記録にも出てこないことから、昭和の初期に掘削されたものかも知れない。

険しい沢の右岸高みの植林を登る歩道は、初めは古道より歩きやすく、登山道としては十分歩けるレベルだった。左の暗い植林中に墓石が見えた。倒れているものを含め四基あり、薄くなった文字に目を凝らすと、寛政九(1797)、文化七(1810)、天保六(1835)などと読み取れた。高度を上げる道の右下に、遠目に見て7~8mほどの不動滝が姿を表した。滝の足元には剣と小祠があり、左岸斜面に建物があった。原全教の聞き書きや藤原氏の話によれば、籠堂ではないかとのことだ。至近にある先の墓石との関係は分からない。この歩道に沿う電柱はその建物へ続いていたが、そこへ行く道は別に沢沿いについているらしかった。歩道は崖となった沢の右岸高くを、トラバースしながら少しずつ高度を上げた。ルンゼ状の小窪を鋼製の橋で渡ると、左上へ登る小道が分かれた。左側の木に、真っ茶色に錆びて殆んど読めない登山者用の道標が打ち付けられていた。落葉で滑りやすい崖の道を足元に注意しながら歩いていたので、三上浩文氏の指摘がなければ気づかなかっただろう[31]。一時的に下ったりして難所を避けながら、切り立った岩壁を掘削した険しい道は、うっかりすると転落の恐れがあり、誰にでも通行をお勧めできるものではなかった。歩道はさらに高度を上げたが、次の滝を過ぎると一気に高度を上げた御岳沢に追いつかれ、鼻を回ってすぐ木橋で左岸に渡った。橋は腐敗して使えないため甲府市のバリケードが置かれていたが、もはや小沢となった御岳沢を容易に渡渉した。植林に入り、すぐ二連の鋼製の橋で右岸に渡り返すと、道型が消えた。よく見ると道が流された形跡があったので、沢の増水や植林で消えてしまったのだろう。ほぼ平坦な暗い植林地を、臆気な道の痕跡を繋ぎながら進んだ。古い赤テープに交じり新しいピンクテープも有り、古道の瀧尾坂よりこの近道の方が使われているようだ。植林中で瀧尾坂から下ってきた古道がいつの間にか曖昧に合流すると、そのすぐ先が、高芝の鋼製の橋である。



左の植林中に四基の墓石がある



不動滝と籠堂らしき建物を眼下に見て



ルンゼ状に渡した鋼橋



登山者が通った頃の錆びた道標



岩壁を穿った険路は落葉で滑り危険



下りの場合はなお滑りやすい



御岳沢の滝を遥かに高捲く



沢の緩い部分を渡る落ちた木橋



登山者なら容易に渡渉できる



二連橋で右岸に渡り返す



道型は流され消えている



植林の痕跡を登り高芝で正道に合流

古道に戻って、高芝から先に歩を進める。道は沢からやや離れた右岸の植林と雑木林の境界に沿って明瞭に付いていた。植林越しに見下ろす緩やかな御岳沢の様子から、かつて雑木林だった頃の美しい風景が想像された。暫く緩登すると石積みの長い堰堤のような構造物が現れ、その上を通る道は二つの鋼製の橋を架けて御岳沢を左岸に渡った。この部分の沢幅が広く湿地帯のようになっているため、大掛かりな橋になったようだ。木材など重い荷を積んだ馬を引くには、確りした橋が必要だったのだろう。橋台の幅は牛馬道規格なのに橋が狭い歩道用なのは、橋の架け換えの時点ではもう歩行者しか通らなくなっていたためと思われる。前方に古道を横切る猫坂林道の擁壁が見えてくると、御岳沢の左岸をなおも遡る道を左に見送り、猫坂に沿う支流の右岸を林道下まで進んだ。擁壁に設置された古びた鋼製階段を登り、未舗装の車道を横切った。

車道付近でやや曖昧になった古道は、倒木や伸びてきた灌木で荒れていたが、支沢の右岸に確実に続いていた。時々見るピンクテープは、古道と似て非なるルートに付いていたので、営林作業や登山などの目的で猫坂を登るためにつけられた目印のようだ。実際、荒れた古道を歩くより、ピンクテープ沿いに植林地を縫って登る方が歩きやすく、かつ早いだろう。車道から約130mの辺りで、沢の増水時に削られたためか道が完全に消えていた。すぐ回復した道型はその約50m先で、水涸れした沢の左岸に渡る。渡沢部の荒廃が酷いので、一見そこから沢筋を辿るように見えてしまう。作業時の廃物が散らばる酷く荒廃した伐採跡地を、辛うじて残る道型を判別しながら通過した。植林中の平板な斜面の登りなので、やや挟れた古道の道型が降水時の水路になっているらしく、今歩いている場所が古道なのか水流跡なのか迷う状態だった。水流跡なら直線的に落ちるはずなので、途切れず規則的に蛇行して登るその溝が古道であることは疑いないものの、時々現れる明らかな道型を見るたび安心した。枯枝や落葉が詰まって歩き難いこと極まりなかった。それがピンクテープの新経路が歩かれる理由であろう。前方が覆い被さる壁のようになる1100m付近で、本当の涸窪と古道が幾度か連続して交差する箇所があり、実に紛らわしかった。古道は壁状地形に右にトラバースしながら取り付き、倒木混じりだが明瞭な道型で三度の折返しを入れて急登した。古来、「根子坂」と呼ばれた猫坂は全般にガラダラの登りだが、このような木の根を掴みたくなるような急斜面に因んだ名であるのかも知れない。やがて傾斜が緩くなり猫坂の上に立った。峠状のこの地は相変わらず暗黒の植林内だったが、意外と広々としていた。左には甲斐国志に記された立派な根子坂ノ社の石祠が、右には造林記念碑と山火防止の看板があった。五ノ鳥居の杵石もそのまま残っていた。石祠は再建されたためか部分的に新調されていた。一帯は植林や伐木の人工的空間になり、すぐ下には車道が通るこの場所は、今や風情のかけらもない場所になっていた。

【時間記録】 金桜神社下三ノ鳥居-(10分)-車道終点の水道施設-(20分)-高芝-(10分)-猫坂林道横断-(25分)-根子坂(猫坂)上 [2020.12.6]



植林を緩く登る良道



前方を横切る猫坂林道の擁壁



林道先の植林地で荒廃が強まる



小窪を渡る部分で完全に消える古道



間伐木や枝打ちが溜まって歩き難い



植林中の水流跡に見えるほど荒廃



本物の小窪が交差すると区別不能に



山腹の急登で道型が何とか見え出す



猫坂の頂上が見えてきた



植林中で見える一部が新しい根子坂ノ社



五ノ鳥居の沓石は健在だ

5 根子坂(猫坂)上～下黒平白雲橋

猫坂上の峠状は、かつて有名だった金峰山の眺めが失われてしまった植林地の広い緩斜面だった。高野の明治三十九年の紀行には、「(註:昇仙峡付近の紅葉は)黒平の紅葉には及ぶべくもあらず、根子坂から見渡す限り、目の及ぶ限り、黄に、紅に、樺(註:橙色)に、其間を彩るは常盤木の緑、高山是れ錦とや云ふべけん」「右を見ても、左を見ても、後を返へり見ても、木は紅に、黄に、空は藍色に」と、この上ない紅葉の美しさについて筆を余す所なく記されている[5]。支尾根の右に沿って北斜面を緩く下ると、約100mで植林を抜けて、左に折れながら急に下り始めた。下り出しで右から合わせる薄い植林用の踏跡は、右下を通る御岳林道から来るものだ。左側の足元に、三上氏の報告通り[31]、頭の欠けた3～40センチ程度の小さな馬頭観音が置かれていた。折り返しながら、灌木とヤブに覆われ礫が転がる雑木林の悪路を下った。たまに見る赤い小杭でここが道であると確認された。40mほど下で御岳林道を横断した。古道は法面に削られ消滅していたので、転げ落ちるようにその崖を下った。いったん古道を離れれば、下りやすい箇所を探してより安全に車道に降りることも可能だ。

車道の下に続く道型は、車道建設で激しく傷んでいるうえ、ヤブや廃棄されたゴミで分かり難い状態だった。古道は涸沢沿いに下るようになり、道を示す赤杭は続いたが、道型は消えてしまった。豪雨時の濁流に押し流されてしまったようだ。地形的には涸沢の左岸に道があったと思われたが、ゴミと土砂に埋もれて明らかな痕跡は認められなかった。右岸斜面に何かの敷地だったと思われる石積みを見て下ると、1042m二股で左岸に移る雰囲気があるも、道はいつそう曖昧になった。なるほど直下に堰堤があり、しかも左岸が岩壁になっていた。この状況では堰堤を右巻きで下るしかないため、道が一旦途切れていたのである。昭和三十七年の空中写真を見れば、二股付近で道が左岸に移っていることが確認できる[28]。堰堤下で、左岸に微かな道の痕跡を見ると、赤杭とピンクテープが現れた。しかし道路やその水抜工施工に伴う斜面崩壊もあり、本来の道型はほぼ破壊されていた。別の堰堤が現れ、左上を通過した。植林地に入り、間伐木とヤブの中のあるかなしきの作業踏跡を下った。本来道があったかも知れない部分も植林されていて、古道を感じさせる道型は残っていなかった。涸沢が微流になる頃、月見沢の本沢との合流が目前に迫った。少し道型的な雰囲気を感じると、道は下ってきた支沢の右岸へ渡った。ヤブの中に損壊した橋台の石積みがあり、橋の残骸か分からぬが丸太が二本引っかかっていた。右岸に渡ると、植林作業用の車道跡が来ていたが、それとは別に、支沢沿いの茨混じりの荒地にうっすらと古道の痕跡が続いていた。道は4～50m先でV字型に折り返して下り、月見沢右岸の崖上で急に右折し、橋を架けて左岸の燕岩直下に渡る形跡が見られた。昭和四十年に舞田が渡った木橋[18]は跡形もなく、右岸側の橋台の一部だけが残っていた。左岸側は沢に沿う新しい車道の擁壁のため、橋台はもちろん、古道自体も車道の下敷きになってしまったらしかった。適当な場所から月見沢に下り左岸に渡渉したが、目のコンクリートの擁壁を登ることができず、約100m下流でようやく車道に上がれる場所を見つけた。燕岩の所で沢を渡る本来の古道を歩いていけば見られたはずの燕岩を、車道を少し戻って見てきた。鱗状に岩に切れ込みが入った、つまり複数の方向に柱状節理が走った岩壁で、黒平付近ではよく見られるものだが、これだけ規模が大きいものは珍しい。なお燕岩付近の古道の痕跡は、初版地形図の道とよく一致し、荷車が通行できるよう大きな橋台を作って橋を架けたものであることから、古道といっても近代のものと考えられる。

車道に上がった地点から数十mほど行った辺りは、一ツ屋、一軒家などと呼ばれる廃村である。文字通り一世帯のみが暮らしていた場所で、昭和四十年の舞田の訪問時にはまだ家屋が残っていたというのが[18]、今や山腹に拓いた畑地や作業道の跡が残るだけである。そのため確りした道型が随所に見られたが、それらは全て荒川支流の崖に阻まれ行き止まっていて、黒平へ続く道は地形的に現在の車道の位置にしか拓き得ないので、古道は現在の車道の位置にあったと思われた。それは空中写真でも確認された[28]。黒平へ向かう車道は、続けざまに二つの小尾根を回るが、いずれも小尾根の先端をきっちり回らず、切通で短絡していた。二箇所ともそこを丹念に回っていた古道の痕跡が残っていた。しかし一世代前の車道時代のガードレールがあるなど、必ずしも古道らしい雰囲気ではなかった。二

つ目の小尾根を回った後、古道は大平川を下って渡り登り返すのだが、車道下の高さ数mの擁壁のため、残念なことにシュリングかロープを使わないと古道へ降りられなくなっていた。このポイントは、道具を使って降りるか、擁壁下へ下れる場所を探して回り込むかしがなく、一般にはおすすめでできない。擁壁下から急斜面の比較的明瞭な道型が川へと斜めに下っていた。渡河点付近の古道は兩岸とも不明瞭だが、堰堤上で川を渡ると、古道は右岸と対称形の坂道で左岸を斜めに登っていた。川を渡った所の二体の石像は、無縁仏だと聞いた。道は一度折り返して986mの峠状で支尾根を越えて高屋沢に入り、すぐに渡った。直上のフェンスで囲われた敷地はマウントピア黒平の駐車場である。古道は高屋沢の左岸を行くらしかったが、左上の車道造成と植林とで道型は一部を除いて消滅しており、植林地を適当に進み、寒沢川の手前でマウントピア黒平入口を通ってくる現在の車道（御岳林道）に上がった。寒沢川を白雲橋で渡ると、昇仙峡から来る野猿谷林道にT字路で突き当たった。

【時間記録】 根子坂(猫坂)上-(10分)-御岳林道横断-(20分)-燕岩-(15分)-大平川右岸で御岳林道から離れる[ここまで 2020.12.6]-(10分)-下黒平白雲橋 [ここまで 2020.12.20]

※大平川右岸で御岳林道から離れる地点は、車道擁壁のため車道と古道との移行困難。



植林を抜けた所の馬頭観音



雑木林の下りは辛うじて道が分かる



崖のような法面を御岳林道へ降りる



林道下の今にも消えそうな古道



堰堤を右巻きで下る



左岸に痕跡を見るもほぼ道型なし



次の堰堤や護岸など人工物が続く



植林中の作業道的な痕跡を下る



橋台の残骸で右岸に渡ると知れる



燕岩下で左岸に渡り返す橋台の残骸



左岸から見ると一応の形が残っている



現車道合流点の上方にある燕岩



一ツ屋の廃墟



現車道の切通しを大回りする古道



次の切通しの大回り部分



車道擁壁下の古道へは移行困難



大平川へ下る



左岸に渡ってすぐの無縁仏



小さな乗越を高屋沢へ越して渡る



マウントピア黒平付近は車道造成で消滅



白雲橋右岸の古道の残骸

6 下黒平白雲橋～龍ノ平

白雲橋のT字路から車道の法面を登って集落へと続く簡易舗装の細い急な歩道を登ると、手作りの動物除けの柵が設置してあった。慎重に枝木を一つずつ外し、何とか越えたら丁寧に元に戻した。身体能力と注意力とを要する作業なので、柵を壊さず元通りに戻すことができないなら、集落の方に迷惑になるので通るべきではない。坂の上には、長閑で美しい下黒平の村落が点在していた。狭い農道ほどの歩道脇の畑に並ぶ古びた地蔵は、絵に書いたような山村の風景だった。緩く登った村の上端には庄屋のような大きな民家があり、村を見下ろすように少名彦命を祀った小社が置かれていた。

村の出口もまた、今度は鋼製の鹿柵で塞いであったが、網の破れを潜って通過した。コンクリで溝状に固められた石堂沢を右岸に渡り、植林をうねうねと蛇行して登った。作業道として使われていると見え、歩きやすかった。3～40mの高度を稼ぐと、のらりくらりした緩い登りになり、道型が不鮮明になった。遠回りして上がって来た車道（御岳林道）が急接近し、古道は少し切り崩されていた。道の痕跡や踏跡を繋いで進むと、緩い窪状で道が消滅し搜索を要した。時々見るピンクテープが目印になった。その先、下黒平、上黒平を隔てる峠の部分は、かつて植林関係か何かの作業場になっていたらしく、古道は消滅し、人為的な造成工事で地形が変わっていたので通過に手間取った。まず造成地の下側の段差を乗り越え、作業用車道を横断、茅の茂った平坦な作業場跡を横切ると、トタンの資材置き場とプレハブ小屋が建っていた。この一帯は造成により古道が完全に消えていた。

プレハブ脇を通る御岳林道のカーブミラーの近くから古道の袂れた道型が回復したが、ヤブとゴミに埋もれ倒木が詰まって、通行が物理的に大変な状態だった。突破不能な深い茨を含むヤブの部分は下捲きした。その先ヒノキ植林に辛うじて古道の道型が残っていたが、酷く荒れて崩れた箇所もあった。また車道が近づいてきて、道型が不明になるとともに茨ヤブが酷くなったので、無理やり車道に移った。その地点、車道は前方の小窪に橋を渡していたが、その小窪を埋め立てた左側の敷地が昭和五十三年に廃校となった黒平小跡である。塀と正門、「想い出」の碑だけを残して更地になっていた。この辺りから上黒平の集落に差し掛かり、古道はほぼ車道と化しているようだった。下り出す直前に、道祖神が並んでいて、金峰山を背に集落を一望する場所があった。

上黒平の古い家並みを通り過ぎた。村落中央の道が鉤型に曲がる所に、古い道祖神や祈念塔が置かれていた。小さな村の向こう端に、民俗芸能の能三番で知られる黒戸奈神社の凛々しい姿を見た。黒平の村名は、社名の黒戸奈が転じたものとされる[8]。右には甲府市民専用のレジャー施設いこいの里があり、その先、乙女高原を越えて塩平に抜ける荒川林道を右に分岐すると、甲府市有林の上黒平森林事務所が立っている。

古道はここから荒川の悪場を避け、仏坂を登って鳥居峠を越えるが、仏坂の下部は御岳林道に串刺しにされ、造成により著しい影響を受けていた。旧版地形図が示す古道は、初め森林事務所から北へ向かって支沢を遡り、コレイ坂の峠道と分かれて仏坂へ向かう支窪に入っている。しかし元の地形が不明になるほどの人工的な造成が行われているため、かなり注意深く古道の痕跡を求める必要があった。まず森林事務所の整地して道型も見えない敷地を通り抜け、一度目の車道交差となる。小沢右岸の草むらに道型を見つけて追うと、数十m先でプツリと途絶えた。木橋でもかけて沢を渡っていたのであろう。注意深く沢を渡り、目の前の車道擁壁をよじ登った。二度目の車道交差である。反対側の傾斜に、ちょうど長い山側の法面が終わったところの小さな踏跡で取り付いた。茨の中にすぐ古道の道型らしきを見るも、造成か道路建設の残土かで埋まって消えてしまった。地形的にはほぼ真っすぐ登るはずだが、それに沿って登るべき仏坂の窪地形そのものが埋め立てられ分からなくなっていた。再度立ちはだかる車道の擁壁は高く登れず、左から捲いて車道の上に上がった。ここが三度目の車道交差である。山側に仏坂の窪状地形と左岸の古道の道型を見て、それに入った。窪状も古道も石や枝で荒れていたが、通ることは可能だった。古道は右岸に渡り少し登ると、また車道の高い擁壁に突き当たった。右岸側の踏跡で車道に上がり、四度目の車道交差である。ここでようやく一度車道を離れることができた。奥に「第六回甲府市水源林まつり記念育樹」の標柱が見え、そのまま窪状右岸の廃

作業道に入った。この辺りから植林になり、古道は作業道として使われていたようだ。倒木を跨いで植林地に入り、一時は歩きやすかったが、蛇籠が積まれた地点で途切れてしまった。その先は車道建設時の土砂に埋もれ道型が消えているので、谷の右岸に沿って車道まで適当に登った。昭和五十一年のガイドでは、この辺りに道標があり仏坂の近道を示していたという[32]。車道はすぐに鳥居峠を越えた。かつて六ノ鳥居があったという鳥居峠は、ただの車道の切り通しになっていた。

古道は、峠の数十m先を右に入る植林作業車道になっているようだった。だがそれを百数十mも行くと、作業車道は明らかに古道の道筋を外れて右にカーブを切り出した。左の植林中に道型を少し探すと、夥しい間伐材で埋もれながら続く道型が確認できたので、それを追った。伐採時の作業道との見分けが難しかったが、現在の車道下に平行する道型が古道と思われた。堰堤が連続するカクシ窪を渡る地点は道型が完全に消えていた。左岸植林の斜面で作業道的な踏跡が現れたが、古道は頭上の車道造成で消滅した可能性が考えられた。鼻を回って精進川右岸に入る辺りから、古道かも知れない道型が分かるようになり、川沿いに間伐で荒れた植林地を緩く登った。次第に車道の高さに近づき、カクシ窪出合から直線距離にして約400mの地点で古道は車道に吸収された。暫く車道歩きを余儀なくされた。右に注意しながら歩いていると、時々古道らしい道型が現れたが、ヤブを分けて辿ってみてもすぐまた車道に吸収され、続けて歩ける部分はなかった。やがて車道は龍ノ平橋で精進川を左岸に渡し、急に左にカーブを切りながら軽く登った。古道の渡河点は、地形的に長坂沢の出合近くだった可能性があるが、その痕跡は見られず分からなかつ

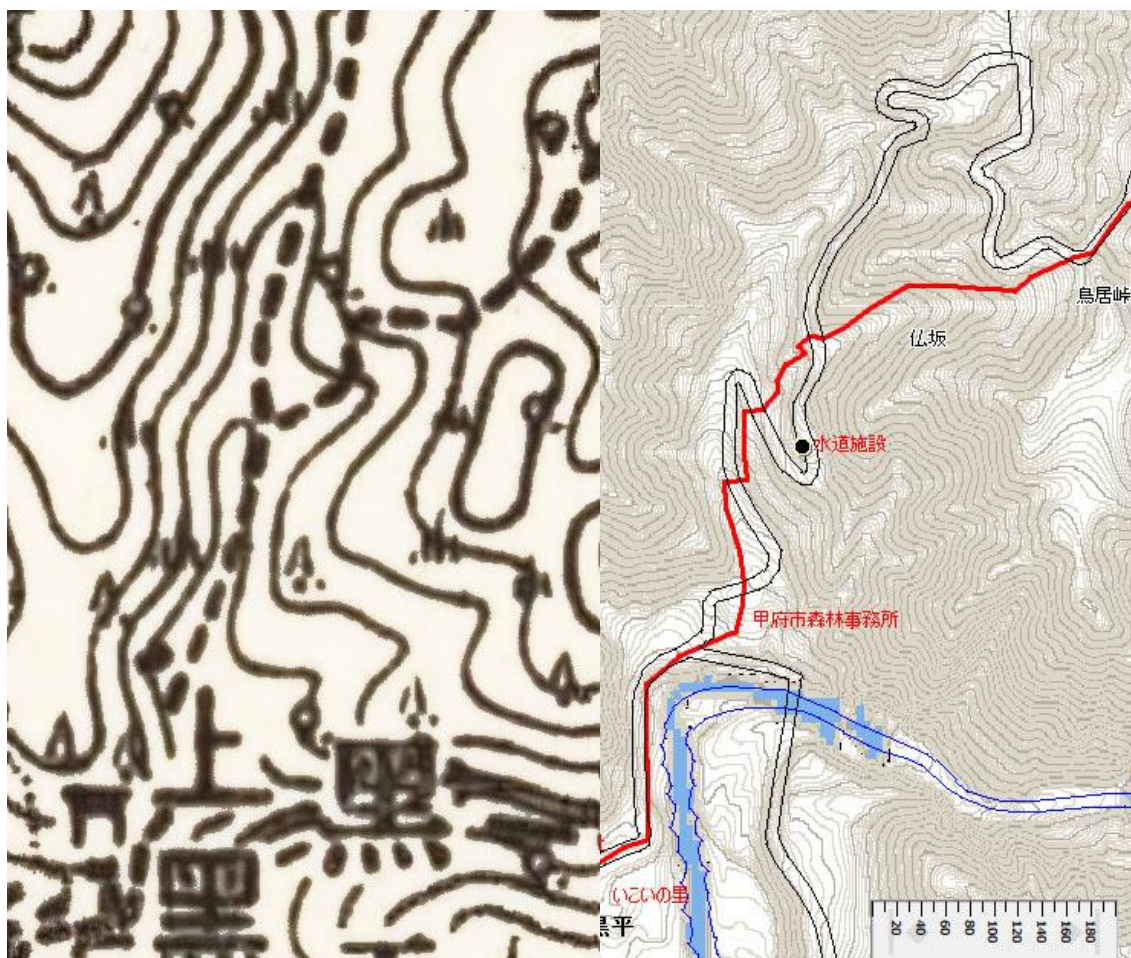


図9. 仏坂下部の古道の推定位置

(出典:陸地測量部 五万分一地形図「塩山」[26](左)、国土地理院 基盤地図情報 5m標高(右))

た。カーブ先に石祠と道標があり、金峰参道はここで御岳林道を離れて山中に入る。前方の平地は龍ノ平で、甲府市森林浴広場の施設が遠目に見えた。金峰登山のためここまで車で来た場合、この先の御岳林道は一般車が入れないため、ここが登山口となる。

【時間記録】 下黒平白雲橋-(25 分)-プレハブ作業小屋[ここまで 2020.12.6]-(10 分)-黒平小跡-(10 分)-上黒平
甲府市森林事務所-(15 分)-鳥居峠-(35 分)-龍ノ平 [ここまで 2020.11.17, 2021.2.23]



野猿谷林道に出合い下黒平集落へ



集落入口の動物避け柵



信仰厚き山村の風景



村内の道は今でも軽トラがやっとの幅



少名彦命を祀る村内の祠



林業用に良く整備された道を登る



植林が途切れると不明瞭に



作業用の造成地で道が途絶える



何かの敷地だった広い茅原を抜ける



トタンの作業場とプレハブ脇を通過



車道と並行する古道の道型



上黒平へ向かう薄い道型



黒平小跡で車道に吸収される



村を見下ろす道祖神



村内の鉤型の道祖神と供養塔



能三番で知られる黒戸奈神社が左に



甲府市森林事務所の敷地を抜ける



一度目の車道交差後は小沢右岸を



二度目の交差後の部分的な道型



車道法面で行き詰まり左から捲く



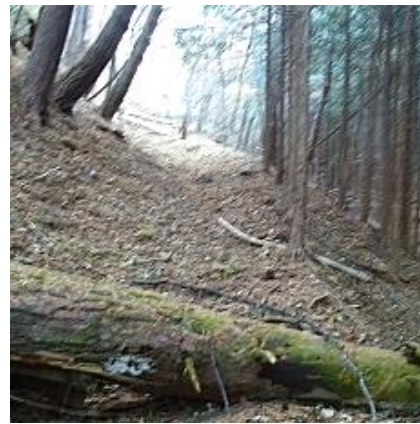
三度目の交差後は多少古道が続く



四度目の交差でようやく仏坂にかかる



造林後の放置された荒れ放題の道



仏坂途中の道がよく残った部分



鳥居峠を切り通して車道が通過する



峠先を右下に下る古道跡の作業車道



植林地に入り間伐木で道が埋まる



カクシ窪付付近は完全に道が消える



精進川右岸を行く薄い道型



川の縁で明瞭な踏跡になる



車道につかず離れず明滅する古道



龍ノ平入口の石祠で車道を離れる

7 龍ノ平～御小屋沢造林記念碑

龍ノ平の駐車場から金峰山に登る登山者は多いが、確定したコースはなく、車道歩きも含め幾つかのルートがあるようだ。荒廃が酷いこの区間の古道は登山者にとって歩き難いばかりで、場所によっては通行の形跡は全く見られなかった。ただ、尾根筋のバリエーション登山として古道の一部を利用する方がいると見られ、マーキングが見られた場所もあった。この区間は、道は不明瞭だが、地図読みさえできれば容易に歩くことができる。

道は森林浴広場の周囲に沿って進み、100m弱の地点で未舗装の園内車道を横断した。この地点の道の付き方は大変分かり難く、下り方向は歩行を妨げるように枯枝が積まれ、登り方向は車道造成とヤブの繁茂とで道の入口が消えていて、さらにそこから園内車道の支線が分岐しているので、ちょっとした捜索が必要かもしれない。蛇行して登る挟れた古道は枯枝が詰まって歩き難く、豪雨時の水路となり詰まったものなのか、所々に枯枝の大きな束が積み重なって道を塞いでいた。普通に道として歩ける状態ではなく、古道は廃道扱いのようだった。約50m登って、1290m付近で御岳林道を横切った。崖状になった山側の法面の取り付きは若干の危険が感じられ、ごく偶に通る古道の登山者が強引に登った踏跡が付近の数ヶ所に付いていた。

御岳林道を過ぎると、道の善し悪しは別として古道は概ね明瞭で、歩く気になれば歩ける状態であった。相変わらず倒木や枯枝が詰まった水路のように挟れて荒れた道を、急登した。1318m付近でカラマツ植林の尾根に乗ると、以後常に尾根に絡んで登るようになった。荒れた作業道といった感じで、周囲より窪んだ道型と時折見られるマーキングのため、大きく迷うところはなかった。周囲がミズナラやイヌブナになると、大量の落葉をラッセルのようにかき分けて進んだ。道が平らになる部分は、落葉に埋もれて少し分かり難かった。僅かに伐り残されたこの自然林が、かつて一帯全てがブナやナラの下に笹が茂る豊かな森であったことを思い起こさせた[19]。枯木の間から金峰山の五丈岩がくっきり見え、漸く登山らしい雰囲気になってきた。道は、尾根の左を登ったあと、カラマツやヒノキの植林の辺りで右を捲くようになった。その先1409m小峰の右捲きは、カラマツの土壌保持力が弱いため道型があいまいになるほど荒れていて、ヤブっぽい細道になっていた。地形図で小さな崖記号がある辺りの1400m付近は、20m位の間、斜面全体が崩落していた。

尾根を右に左に移動し、もしくは尾根上を蛇行しながら、一気に1500m近くまで高度を上げた。古道上に横たわる大倒木を潜ると、古びて読み難い鳥獣保護区の標示板があった。そこから出る支尾根の方が主尾根に見えるので、下りでは迷いやすい箇所である。急に広がった緩い尾根の僅か右を捲く薄い道を辿るようになった。尾根筋も踏まれていたが、道の付き方から右捲きの方が古道らしく思えた。モミが優占する広い尾根が狭まると、軽い登りの後、伐採で明るく開けた尾根上の1540m付近の平らな場所に出た。古道はその右端を通過していたが、比較的新しい伐採地らしく、古道を無視して造成された作業車道が交差していた。そのため車道が横切る部分で、古道の下側は積み上げた枯枝の山で塞がれ、上側もヤブで分かり難くなっていた。

カラマツ植林の中、古道は荒廃が強まり、ヤブや道を塞ぐ倒木、崩れて埋まった箇所等で、かなり歩き難くなり、殆んど歩かれていないように見えた。古道ルートを辿ろうとする登山者も、この区間は敬遠して適当に歩きやすい箇所を拾って通行してるのだろう。尾根の右寄りをトラバース気味に登るうち、自然林が現れ倒木が減ってきた。山腹を蛇行しながら高度を上げ、傾斜が緩むと保安林の看板を見て、尾根は広く真っ平らになり道型が不明になった。道は尾根の芯に近づき、そのまま乗越しているようだった。ここが檜峠(1619m)であろう。暫く尾根の右を登ってきた道が、ここから大きく尾根の左に逸れるので、尾根を乗越す肩状のこの場所が、地形的には最も峠らしい。九十年以上前に歩いた高野は、付近が終始ナラの森であることからその名に納得したという[5]。明治三十七年の測量記録には物見三角点(1709.7m)の通称を物見山とし、黒平から金峰道を登ってきて峠の右側にあるとしている[33]。国志では「檜嶺(トウゲ)ト云坂路羊腸タル處ニ物見石アリ」とし、高畑も「檜峠の上に在る物見石」と、ここが檜峠であることを示唆している[20]。右から登って来た御岳林道からの廃車道が、近年「金峰古道」コースとして歩かれる登山道であろう。よって

この先、今までより多少は道らしくなることを期待した。

平坦な檜峠からの道がどう続くか判断に迷ったが、尾根の左寄りに見えたピンクテープが良い目印になった。ここからは登山道として利用されているためか、道の状態は作業道程度になり、さほど悪くはなかった。物見三角点の左を水平に捲く間、伐採跡地やシラビソ、カラムツの小植林を通過した。カラムツの一带はやはり道の荒廃が進んでいた。

物見三角点を捲き終わった辺りの尾根上に、突然真新しい百本程度の伐木の山が現れ驚いた。付近の山が伐採の最盛期らしく、御小屋沢から尾根の西を回り込んで作業車道が延び、そこで再び御小屋沢側に尾根を越していた。古道はすぐ新しい車道に呑み込まれ、暫く車道化されているようだった。車道の右側を並走する痕跡らしきを見て歩いてみると、数十年前の古いジュース缶が落ちていてるなど古道の可能性を感じたが、連続する明確な道として残っているわけではなく、基本的に車道を歩かざるを得なかった。1692独標南の小鞍部で車道は尾根の右に移った。尾根上に付いた切り開きは防火帯で、試しに歩いてみたが古道らしい道型は見られず、捲かずにきっちり尾根筋辿っている、古道でないと思われた。車道が尾根の右側に移って約350m行くと、車道は再度尾根上に戻るが、その寸前で右へ緩く下る作業道があった。一帯の伐採と植林により全く面影が消えていたが、これが古道である。そのまま車道を進んでも同じ地点に出るが随分遠回りになる。タイミングよく刈払い直後だったので大変歩きやすく、テープのマーキングも確りしていた。一般向け登山道と言えるほど、格段に手入れが良くなった。御小屋沢の小流を丸太橋で渡り、低い笹原を進むと、先程離れた車道が回り込んでくる所を横断した。車道の手前左に造林記念碑が、少し離れた右方にプレハブ作業小屋があった。扉が無くなっていたが、雨露程度なら恐らく凌げるだろう。

【時間記録】 龍ノ平-(1 時間)-檜峠-(15 分)-作業車道-(10 分)-作業車道離れる-(3 分)-御小屋沢造林記念碑
[2020.11.17]



ここと山頂にしかない杭打ち式の道標



ヤブに埋もれた森林浴広場の出口



大量の枯枝で塞がれた所が数ヶ所



一瞬道らしい部分が現れる



御岳林道横断時は崖状の法面を突破



倒木や枯れ枝が詰まった溝状の古道



落葉で判然としないナラやブナの森



捲きの部分は崩れて踏跡程度に



ほぼ読めない鳥獣保護区表示板



緩い幅広尾根を道型をよく見て捲く



ピッタリ尾根上を行く歩きやすい箇所



1540m付近の開けた平坦地



伐採で荒れヤブや枯枝で不明瞭



小さな崩れや倒木でしばしば道が消滅



真っ平らな檜峠で尾根左から大捲きへ



カラマツ植林の多少良くなった捲道



突然現れた伐木の山と作業車道



車道造成で古道が崩され消えた



車道はほぼ古道上に敷かれたようだ



車道に沿う断片的な古道の痕跡



御小屋沢を渡ると造林記念碑が

8 御小屋沢造林記念碑～御室小屋跡

造林記念碑からは明らかに道の整備が良かった。少なくともピンクテープの付いた今日の登山道を辿る限り、山慣れた登山道なら容易に通行できるが、ただしその場合は一部で古道と異なるルートになってしまう。

原全教が「暗い見事な美林」と評した森林や、高野が報じた天然カラマツ林も、跡形もなく伐採され植林になっていたのは残念だったが、明るいカラマツ植林下の笹原は、手入れもマーキングも良好でとても歩きやすかった。一見ただの作業道に見えるが、周囲より凹んだ道型により古道と知れた。緩く単調な登りで約150mの高度を稼ぎ、唐松峠を越えた。御小屋沢と御子ノ沢を分ける尾根の乗越で、甲斐国志で「唐松嶺(トウゲ)」とする地点である。峠の手前に姥子ノ社があり、側に七ノ鳥居が建っていたとされるが、それらしい痕跡は分からなかった。峠を越えるとカラマツ植林が終わり、ダケカンバ、モミなどの混成林になった。もともと金桜神社林であった豊富な金峰山の森林資源に目をつけた東洋遊園地(小野財閥のグループ企業)が、大正十一年に森林を買収し伐採を開始したため、昭和初期には既にこの辺りの伐採が進行していた。昭和十二年、森林は大昭和製紙系の会社に転売され、いよいよ大伐採の危機が迫ると、甲府市は幾多の交渉の末、水源林として買収した[34]。しかしその甲府市も、結局は市財政への貢献を求め、昭和三十四年の第二次経営計画により、唐松峠付近にある白平三角点以奥の登山道沿い50m以内、もしくは標高200m以上の部分を除いて、多くの山林を伐採してしまった[35]。だからここまでは大部分が人工林であった。しかし御子ノ沢流域にまで来ると、初めて自然の山が感じられるのである。

緩く下って、1826m三股で小さな御子ノ沢を渡った。緩やかで広い別天地のような谷で道が消えたが、右股の奥に見える道標に向かって進んだ。龍ノ平以来初めて見た道標には「金峰山」と示されていた。昭和期にはこの辺りまで伐採の手が及び、御子ノ沢沿いに木馬道が敷かれていたため、迷い込んで荒川へ下ってしまう登山者がよくいたと云う[7]。点々と打たれたマーキングに従い右股を進むと、10m近いナメ滝があった。滝を右手から登る古道の上にちょうど倒木があったが、十分通過できた。マーキングはそれを避けて、微妙な泥壁を渡る踏跡を伝って右から大捲きしていたが、却って通り難いように見えた。ナメ滝上で小尾根に取り付くと、道はまた明瞭になった。黒平と水晶峠を指す古道標を見て、苔むしたモミの美森を、点在する倒木を避けながら緩やかに登った。

水晶峠(1925m)は、多くのガイドが記すように、知らずに過ぎてしまうような乗越だった。明治三十九年に黒平の案内人と峠を越えた高野は、十数年前まで御室小屋の御師(小屋番)への連絡用の鐘を吊っていた朽ちた柱を此处で見たと記録している[5]。鐘の数で宿泊者の人数を知らせたとか、道に迷った場合鐘を鳴らし案内を頼んだとか諸説あるようだが、真偽の程も定かでないように思えるこれらの言い伝えは、本当だったようだ。御室川へ下り始めて100m近く行った辺り、標高差にして20mほど下った肩状の地点付近に水晶の採掘場があったらしい。多数の盗掘禁止の看板がこれでもかと架かっていた。峠らしくないその位置に「水晶峠」と記した私設標示板が立木に括り付けてあった。明治三十九年の荻野音松の記録では、「…(註:御室川から)坂路を上れば掌大の平地にある所に出づ、此处にて道又二分せるに、其の右を取りて更に上る事一町許り、遂に峠の頂上に達す、之れ即ち水晶峠にて…」と、明確に乗越の最高点を水晶峠としている[6]。大正末期～昭和初期に通った平賀文男や高畑棟材の記述も、最高点が峠であることを示唆している[19,20]。一方大正九年の大島亮吉の記録では、「水晶峠は登りつめて向こうへ少し下ると水晶峠と書いた標がある。」と、現在の私設表示版の位置に表示があったとし[36]、柏源一郎も翌年それを認めている[37]。かなり昔から、本来の峠からずれた位置に表示が設置される問題があったようだ。憶測するなら、明治～大正期に盛んだった水晶峠の鉱山の位置に、採掘者の目印として「水晶峠」の表示が設置されたものが、今日まで続いているのではなかろうか。一時は黒平住民の生計を支えた水晶も、昭和の中頃までに取り尽くしてしまい、今は欠片さえ見つかるかどうかということだ。

道は小さな谷に沿って急下した後、御室川に向かって緩く下っていた。この緩い下り部分で、ピンクテープのマーキングは、妙な踏跡を付けながら古道を外れていた。しかし薄い道型をよく見ると、古道は谷を御室川直前まで下り、

川の右岸を登っていたことが分かる。もしマーキングを頼りに歩くと、上流側を御室小屋、下流側を黒平と示す御室川沿いの甲府市の道標の前に出るはずだが、その意味に困惑することだろう。本来の道は、その道標からさらに数十m下流まで行って水晶峠に取り付くのである。御室川右岸は巨石や倒木で道が荒れ、明瞭な道型が残っていない。ピンクテープは、右岸を100mほど遡った所で、伏流した御室川の白い川筋に誘導しているが、灌木を潜るように古道らしき微かな道型がそのまま右岸に続いていた。それを更に100mほど進んだ開けた場所が、刈合平と思われた。前述のように刈合平の位置は未だ特定されていないが、現時点では御室川右岸の東口参道に出合う地点を言うようなので、ここではそれに従った。石和、塩山から来る東口との合流点であり、毎年夏季に、南口と東口の村がそれぞれ下草の茂る参道の刈払いを行ったことからその名を得たと言う。現在の東口は一般に車でアコウ平へ入ってから徒歩となるが、その道は御室川右岸の刈合平に寄らず、川に出たらそのまま涸れた川筋を遡るようマークが付けられている。そのため南口、東口のいずれから来た登山者も、刈合平へ寄らないようになってしまった。国志よれば、刈合平には「荻合ノ社」と八ノ鳥居があったという。

刈合平付近から御室小屋にかけての道筋は、昭和の頃と現在ではすっかり変わっている。前述の通り、古い道は御室川の1880m二股の左股の伏流した河原を辿るものであったが、現在はその中間尾根に取り付き、そのまま御室小屋跡に達する。令和三年現在のマーキングが示す現在の登山道と対照して説明するなら、現在の道の黒平とアコウ平の分岐にある「←牧丘・塩山／水晶峠・黒平町↑」の甲府市道標の西約30mの森林中の開けた場所が刈合平である。刈合平付近は白い大石が堆積して荒れた感じの、木が疎らな明るい場所だった。奥の方から木々が葉を落とす冬なら五丈岩が望める。刈合平の一角に付いた古い小さなピンクテープが、御室小屋への古道の入口である。黒平からの道として、地形と道の位置とを熟知していれば、約200mの間炎天下河原の石を踏んで行く歩き難い現在の道

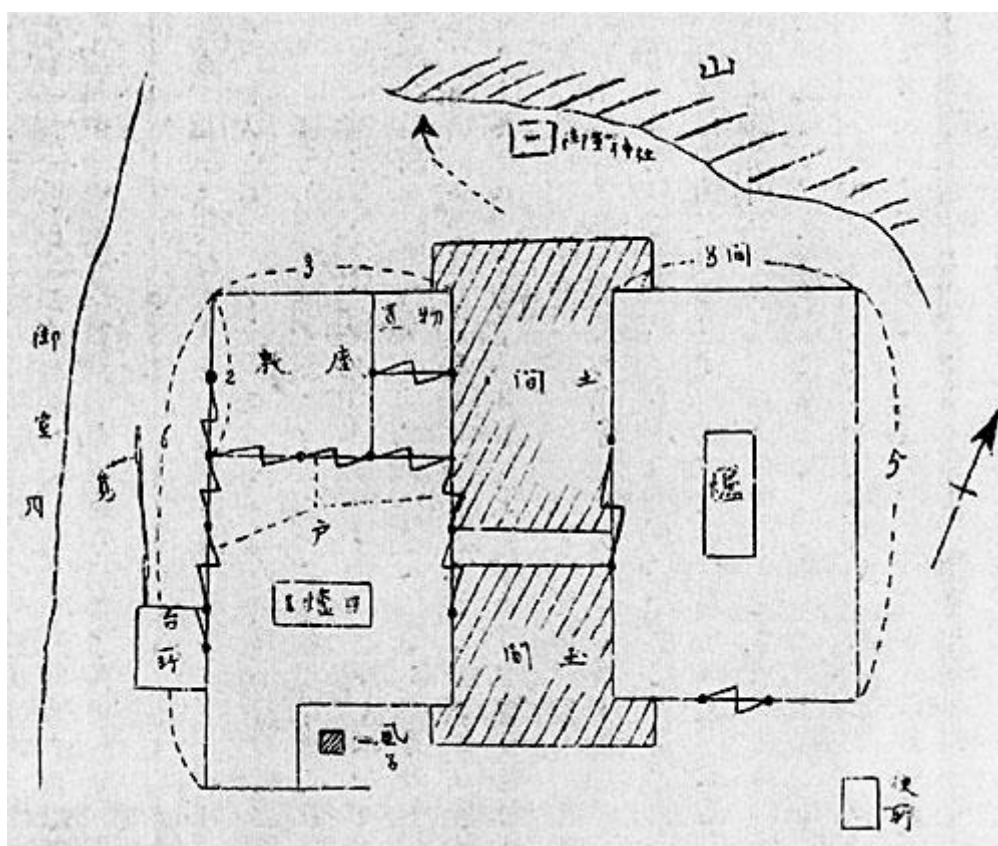


図 10. 明治時代まで使われた修験道の御室小屋の間取り(高野鷹蔵氏作図)

(出典:「山岳」二年一号[5])

よりはと、旧道を選ぶ人がいるのかも知れない。刈合平を出て、約20mで一つ目の、さらに約20mで二つ目のいずれも小さな白い涸窪を渡った。昭和の登山家が記した二つの白い河原がこれに違いない。どちらかといえば大きい二つ目が、賽の河原であろうか。曖昧な踏跡は、複雑な地形を無視するように、直線的に北へ続いた。堤のような尾根状地形を軽く登って越えると石のない涸窪、さらに次の小さな堤状を越えるとまた涸窪があった。これを数十m遡り、右の堤状地形が低くなった所で乗越すと、御室川左股の白い河原であった。森の中なので伏流でも多少湿っぽく、河原は完全な白でなく苔か何かで多少黒ずんでいた。ここから御室まで、古い記録ではゴーロ状の河原を歩いていたようだが、必ずしも歩き難い石の上を歩く必要はなく、最初は右岸、途中から左岸の土の部分の薄い踏跡を辿れば良かった。道標代わりの崩れた石積みか、かつての盛んな往来を物語っていた。御室川を約200m遡った左岸が、御室小屋跡である。この道の廃道化により御室に上がる部分が草木で分かり難くなっていたが、左岸に気をつけていれば、御室が近づくと現在の登山道のピンクテープが垣間見えるので分かる。

御室小屋は老朽化で取り壊され、ロープで囲んだ空地に積んだ廃材の山になっていた。参拝が盛んだった頃の小屋は宿坊であり、期間中は金桜神社の御師が入山料を徴収していたという。小屋からの登り口に御室神社と九ノ鳥居があったとされるが、小屋跡奥の石段が残る遺跡のようなものがそれであろう。神社跡脇にある少し歪んだ三角形の五十町石には「文化十癸酉八月 従是頂上迄五十町 市川宿 世話人渡邊助左衛門」とあるが（小野が「町」を「丁」としたのは誤記と思われる）[14,17]、現在は苔が付いてしまい「文化」「従是頂上迄五」「町」「市」「人」が何とか読み取れる程度である。正徳年間（1711～1716）に建ったという数十名が泊まれる立派な宿坊は、二つの部屋と囲炉裏、座敷、土間、台所、風呂を備えており、明治三十年代に訪れた小島や高野は驚きを隠さなかった[5,13]。かつて賑わいを見せた御室の小屋も、明治五年の修験禁止令により急速に衰え、同二十四年以降は神社の御師も入らなくなり、黒平の村民が番をして鉱山事務所や登山小屋として使われていたそうだ。それも明治四十一年の火災により、小屋も社も灰に帰した[14]。その後再建するも火災や荒廃に見舞われ、十年ほど前（平成二十三年頃）から全く使用不能となっていたが、近年ついに解体されてしまった。明治期の写真と比較すると、小屋の廃材が積まれた小広い敷地に散在する踏石のようなものが、当時の御室の名残なのかも知れない。

【時間記録】 御小屋沢造林記念碑-(35分)-御子ノ沢-(15分)-水晶峠-(10分)-刈合平[ここまで2020.11.17]-(15分)-御室小屋跡 [ここまで2021.6.12]



一般道並の整備状態となり唐松峠へ



幅の広い御子ノ沢を渡る



平坦な水晶峠を越える



水晶峠下の鉤山付近(長井大泰氏撮影)



古道は通らぬ刈合平近くの今の道標



荒れた雰囲気のカ合平



ピンクテープから旧道の微かな痕跡が



一つ目の白い河原を渡る



二つ目の白い河原が賽の河原か



御室川左股に出たところ



この向こう直ぐに御室小屋跡



御室小屋の廃墟



明治期の御室小屋(高野鷹蔵氏撮影)



御室神社跡脇の五十町石と祈祷札



微かに「従是頂上」と読める

9 御室小屋跡～金峰山

この区間は一般登山道と変わらない良い道だが、鎖場があるので問題なく通過できる技量と身体能力は必要だ。小屋裏からすぐに急登が始まった。登山者の多い東口を合わせたためか、一般登山道並のよく踏まれたシャクナゲの良道となった。新しいアルミ梯子の上は、傾斜したスラブに長い鎖二本が敷かれた数十mのトラバースで、トサカと呼ばれる岩峰の一角だ。御室川左股の慶応谷側へ見た目に三十度ほど傾いており、墜死した慶大学生に因んで慶応谷と呼ばれるようになったと言われる。懸垂下降の要領で動けば危険はないが、実際濡れた箇所を踏んでみるとスリップしたので、緊張するところである。登り切ると、道は岩稜を上下しつつ捲いて進んだ。二本目のアルミ梯子は、古い木梯子と並び掛かっていて面白かった。三本目の梯子は古い木梯子の上に重ね掛けしてあった。原全教によれば、岩場を抜けた恐らく2030m辺りに御室小屋への回り道があったという。危険な岩場を通らずとも登れるものを、修行のためわざわざ厳しいルートで登るようになっているのだろう。

道はしばらく慶応谷側を捲きながら登るようになる。2129mの不安定に置かれた巨岩は片手廻しと呼ばれ、足元に勝手明神の小祠がある。尾根に近づくと岩が現れ、離れると深い森林になった。途中左への小さな踏跡をほんの数m辿ると、2212mの突起上で西から南への展望が素晴らしかった。2400m付近で森林を抜け、道型の不明瞭な石の多い尾根を登るようになった。近く見えるのになかなか距離が縮まらない五丈岩にがっかりしながら、黙々と登った。石が多く尾根形状が丸いためルートがやや不明瞭な山頂直下を、道を外さぬよう注意して登ると、五丈岩下の道標に飛び出した。

登り着いた場所は山頂側から見た岩の裏側で、立ちはだかる岩壁下に平らな場所があった。そこには明治十七年の火災で消失するまで、七重扉の厨子に黄金の大黒像が安置された壮麗な本宮社殿が有り、三十人の信者の宿泊が可能だったというのが[7]、いまはその名残として、奥宮の小祠と、かつて本殿を乗せていた石垣が見られるのみである[16]。大黒像を盗み出すため火を放たれたのが火災の原因と言われている[38]。明治十七年の焼失時にはもはや修験道が禁じられていたが、金桜神社の努力によるものであろう、それなりに立派な本宮が再建された。明治三十九年に訪れた高野は、「構造小なりと雖も粗ならず」「板葺屋根を更に板囲ひしてあり」とする一方、「雨漏りて床も破れぬ」と傷んだ様子も報じている。「何某何講」の類の落書きが多数あったといい、まだ信仰は廃れていなかった[5]。写真家でもあった高野により、寒風に吹かれつつ苦勞して撮影した貴重な写真が残されている(図11)。この本宮も、明治四十二年に田部重治が通ったときには信者の火の不始末により

図 11. 明治末期の五丈岩前の本宮蔵王権現

(出典:「山岳」二年一号[5])



現 権 王 蔵 上 頂 山 峰 金

A photograph showing a wooden ladder leaning against a steep, rocky cliff. The ladder is made of light-colored wood and has several rungs. It is positioned vertically, with the top end reaching towards the top of the frame. The cliff face is dark and craggy. The area around the ladder is filled with lush green vegetation, including trees and bushes. The lighting suggests a bright, sunny day.

A photograph showing a wooden ladder leaning against a large, moss-covered log in a forest. The ladder is made of light-colored wood and has several rungs. The log is dark and covered in green moss. The ground is covered in brown pine needles and leaves. The background shows more trees and foliage.

A photograph of a large, light-colored rock formation, possibly a boulder or a small cliff face, partially covered in green moss and surrounded by dense evergreen trees. The rock is the central focus, with its surface showing some texture and color variations. The surrounding forest is lush and green, with many trees visible in the background and foreground. The lighting is bright, suggesting a sunny day.

51



勝手明神の小祠



樹林帯の急登が続く



巨岩を渡りながら五丈岩を目指す



五丈岩前の道標で山頂の一角に出る



焼失した本宮の代わりの簡素なお宮



参道が廃れ鳥居は裏の山頂側に

【参考文献】

- [24]山梨県立図書館編『甲斐国 社記・寺記 第三巻 寺院編 二』山梨県立図書館、昭和四十一年（初版は慶応四年（1868）、甲州寺社総轄職編）、「巨摩郡吉沢村 羅漢寺」207～208頁。
- [25]松平定能（編）・小野泉（校）『甲斐国志 卷之十九』温故堂（再版）、「卷之八十一 仏寺部第九」8～13頁、明治十六年（初版は文化十一年（1814）、甲府勤番）。
- [26]陸地測量部『五万分一地形図 鹽山』（明治四十三年測量）、大正二年。
- [27]太田亮『姓氏家系大辞典 第一巻』姓氏家系大辞典刊行会、昭和十一年、「小田切」971～973頁。
- [28]国土地理院『空中写真（甲府）MCB6210X（1962/05/14）』、昭和四十七年、C4-11。
- [29]北村武彦「金峰山集中登山」（『山と高原』276号、24～27頁）、昭和三十四年。
- [30]原全教『奥秩父回帰』河出書房新社、昭和五十三年、「金峰山附近」187～189頁。
- [31]三上浩文「猫坂」（『やぶ山をこよなく愛する登山ガイド 三ちゃんの山日誌』）、
http://mtgd3chan.blogspot.com/2016/12/blog-post_4.html、平成二十八年。
- [32]実業之日本社編『東京付近の山』実業之日本社、昭和五十一年、「川端下から金峰山」120～123頁。
- [33]陸地測量部『点の記』、「物見測点」、明治三十七年。
- [34]泉桂子「甲府市水源林の形成過程」（『東京大学農学部演習林報告』103号、21～106頁）、平成十三年。
- [35]泉桂子「甲府市水源林における戦後期の経営展開」（『森林総合研究所研究報告』5巻1号、29～59頁）、平成十九年。
- [36]大島亮吉『大島亮吉全集 第5（大島亮吉研究）』あかね書房、昭和四十五年、「金峯山国師岳登山記」342～346頁。
- [37]柏源一郎『山谷の放浪者』三田書房、大正十二年、「十文字峠より金峰山を越えて」174～258頁。
- [38]春日俊吉『奥秩父の山の旅』登山とスキー社、昭和十七年、「金峰山・水晶峠より甲府へ」200～210頁。
- [39]田部重治『山と溪谷』第一書房、昭和四年、「十文字峠より甲府まで」228～240頁。
- [40]原全教『奥秩父・正編』朋文堂、昭和八年、「金峯山」104～110頁。

金峰古道の貴重な記録を残した三氏（敬称略）

荻野音松(1882－1908、特別会員)



実質的に会員公募を始めた明治39年中に入会した「創期会員」376名（日本人個人会員）の一人。付番前に除籍となったため会員番号は無番。東京・日本橋の焼き芋店の息子で、決して裕福ではなかったが、山岳会支援の思いから会費が高い特別会員として入会した。南アルプスや奥秩父の探検山行で大きな成果を挙げるも、弱冠25歳で病没。日本山岳会発起人の一人で、親友でもある小島烏水は、「山岳会の一大損失」と悼んだ。明治三十九年八月に金峰山に登頂し、「山岳」2年2号に発表。

高野鷹蔵(1884－1964、会員番号3)

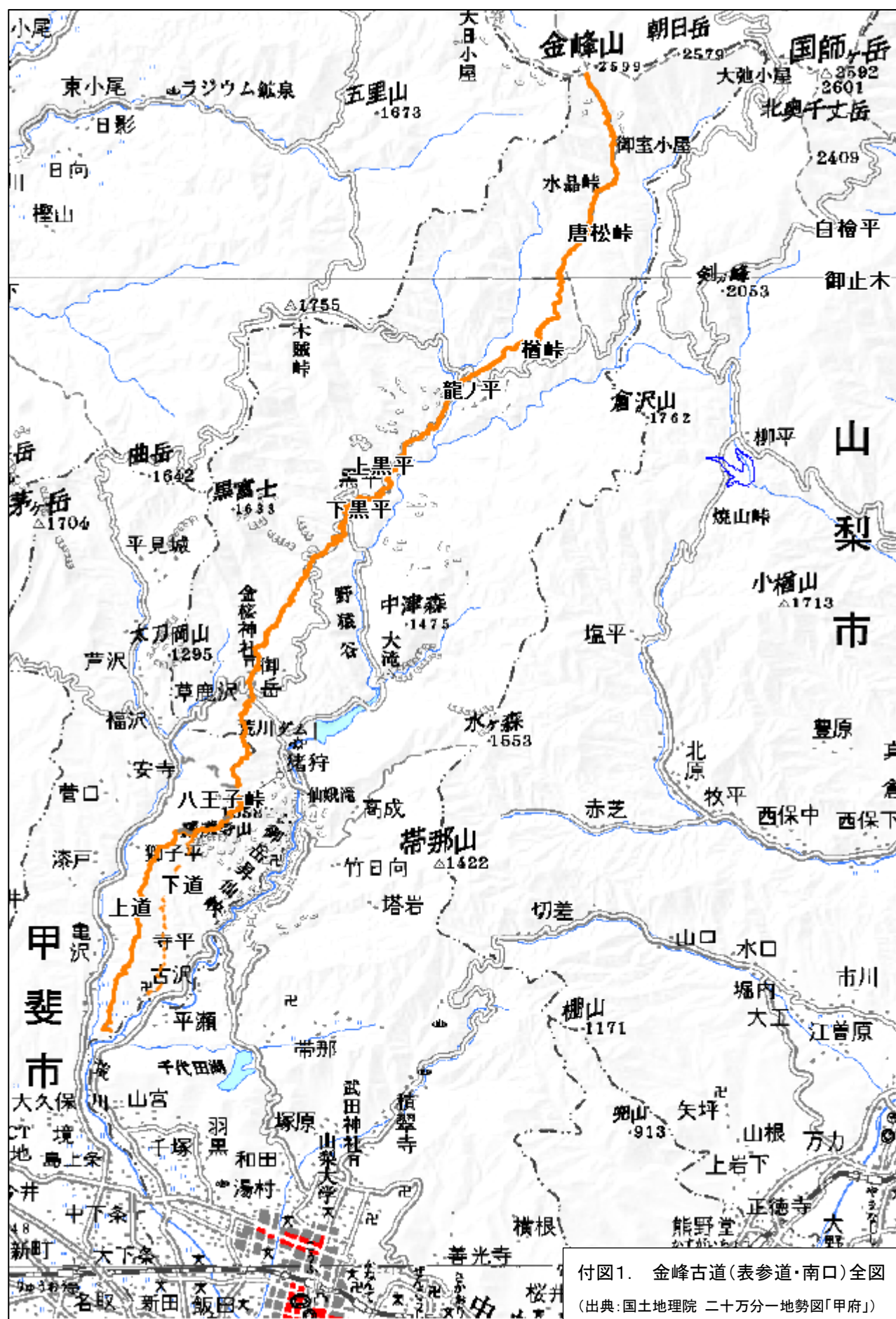


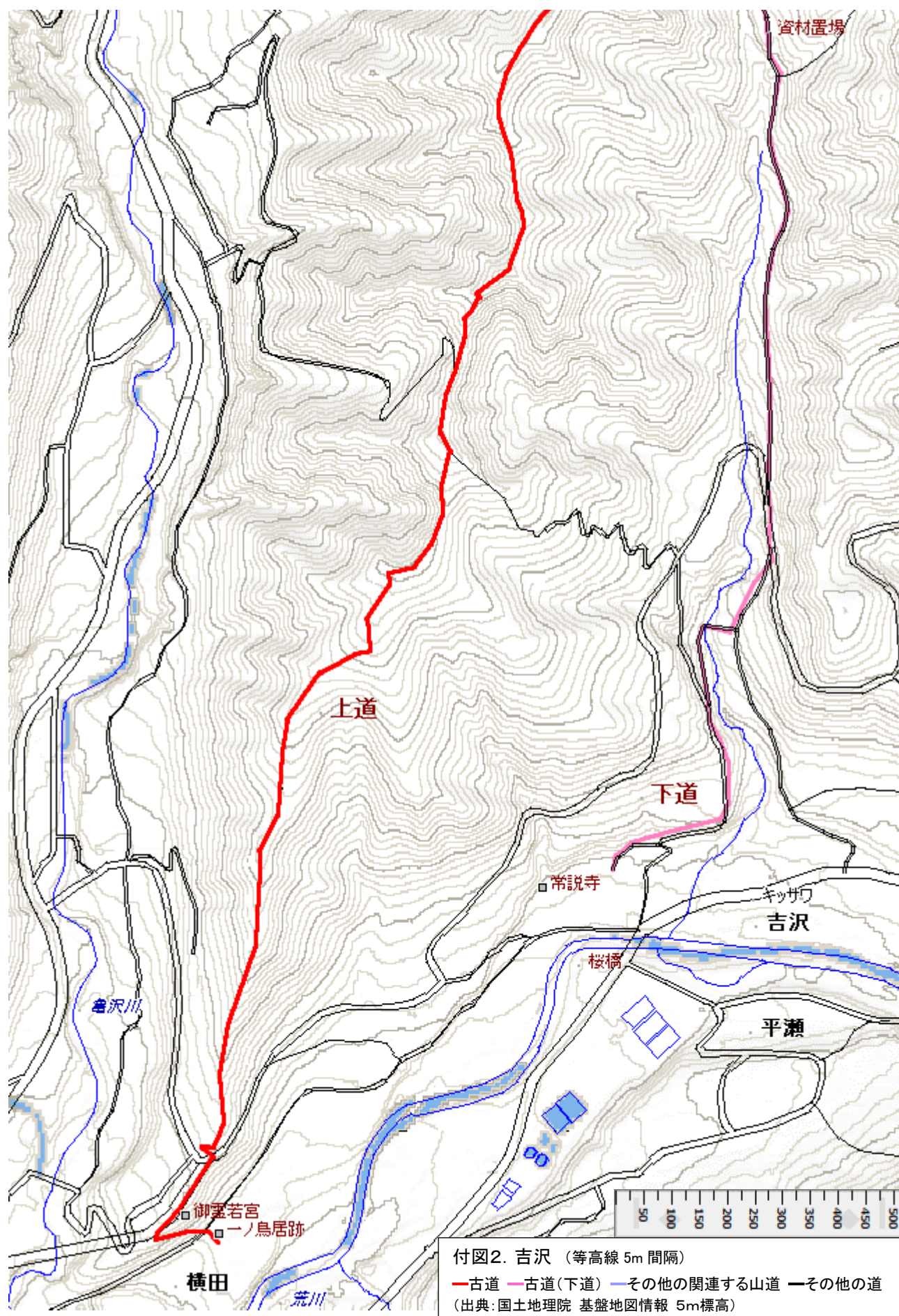
日本山岳会の7名の発起人の一人。創立後の会勢拡大期、長期に渡り会の事務局を請負い、会の発展に大きく貢献した。山岳写真家として惜しみなく機材や制作費を注ぎ込み、「高山溪谷」第1～8輯を刊行する一方、動植物への関心も深く、蝶類およびカナリヤの専門家として著名で、多くの専門書を著した。明治三十九年十月に金峰山に登頂し、恐らく史上初めての写真記録とともに貴重な登高記録を残した。

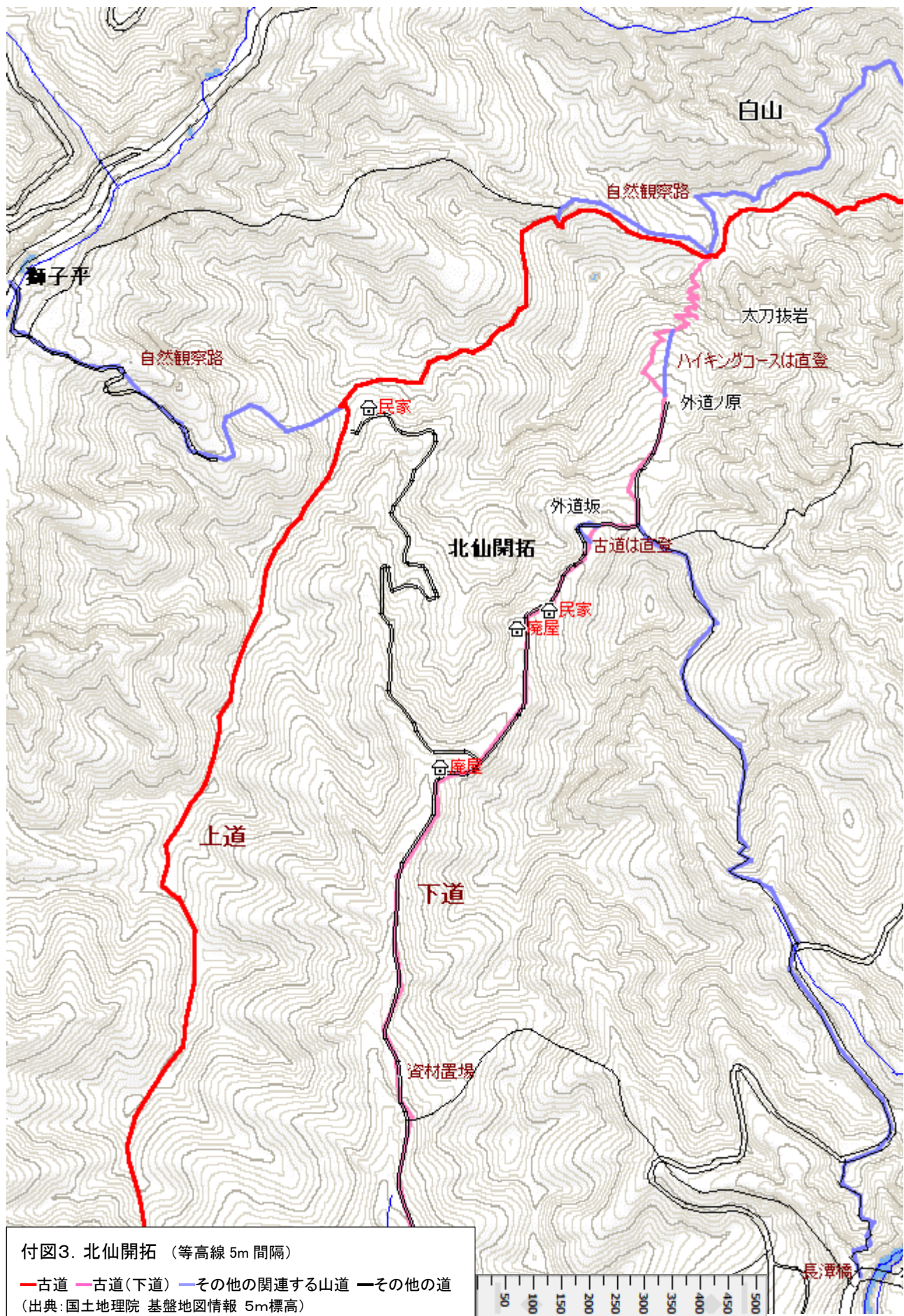
原全教(1900－1980)



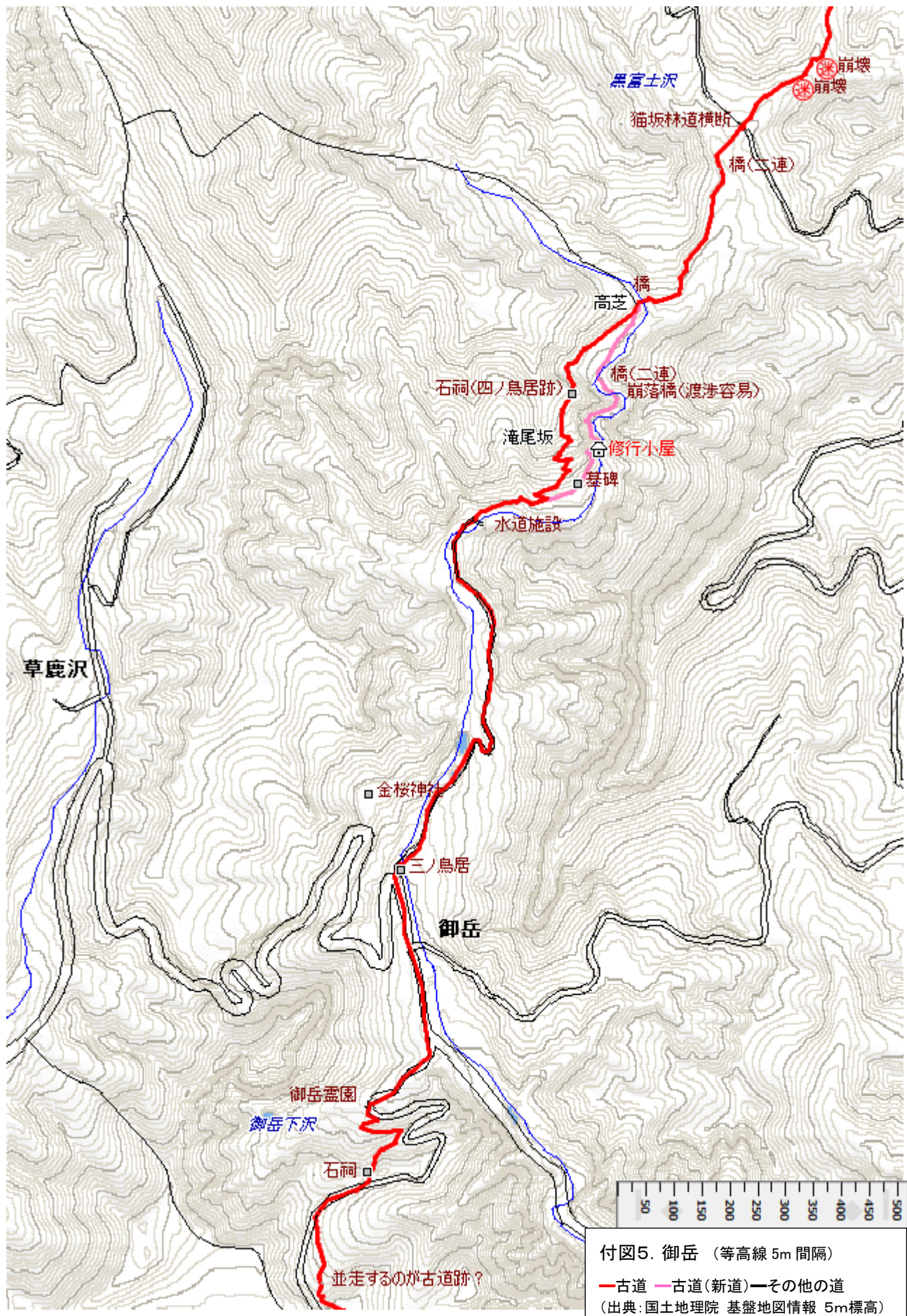
山岳家、民俗研究家。仏門に二度帰依、従軍二回、役所勤務、事業経営など、起伏に富んだ経歴を持つ。大蔵省および東京市勤務時代の大正十二年から昭和九年までに秩父を精力的に歩き、大著「奥秩父」を著した。金峰古道について、南口は甲斐国志以来、東口は史上初めての、詳細かつ体系的な記述を行った。日本山岳会とは、会報への寄稿、小集会での公演、事務局員として支援などの縁がある。低山と溪谷、山村に強い関心を寄せる原に対し、登攀を重視する当時の日本山岳会の主力会員らは強い違和感を示し不遇であったが、一方特に後年、次第に理解を示す山岳家も現れるようになった。

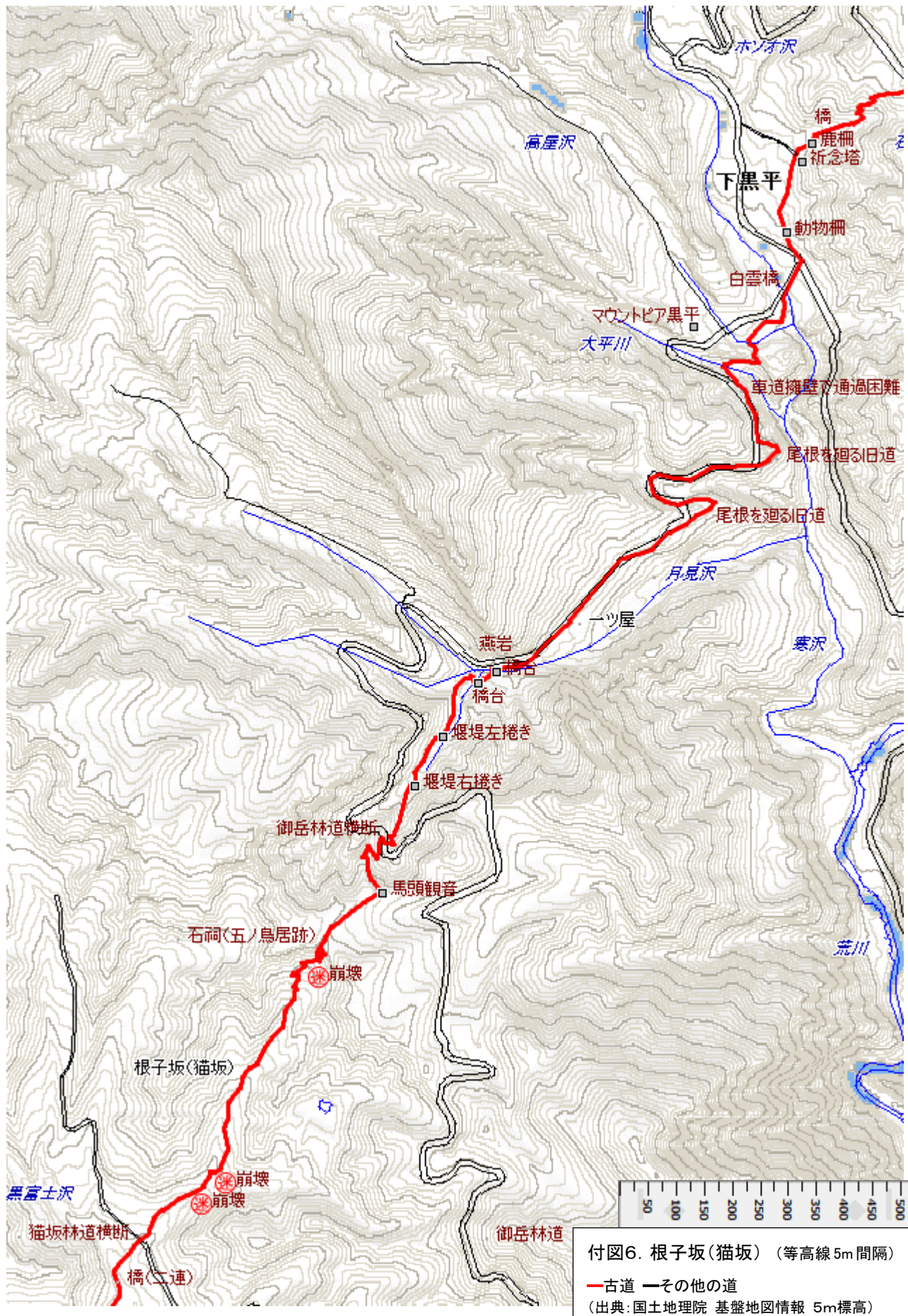


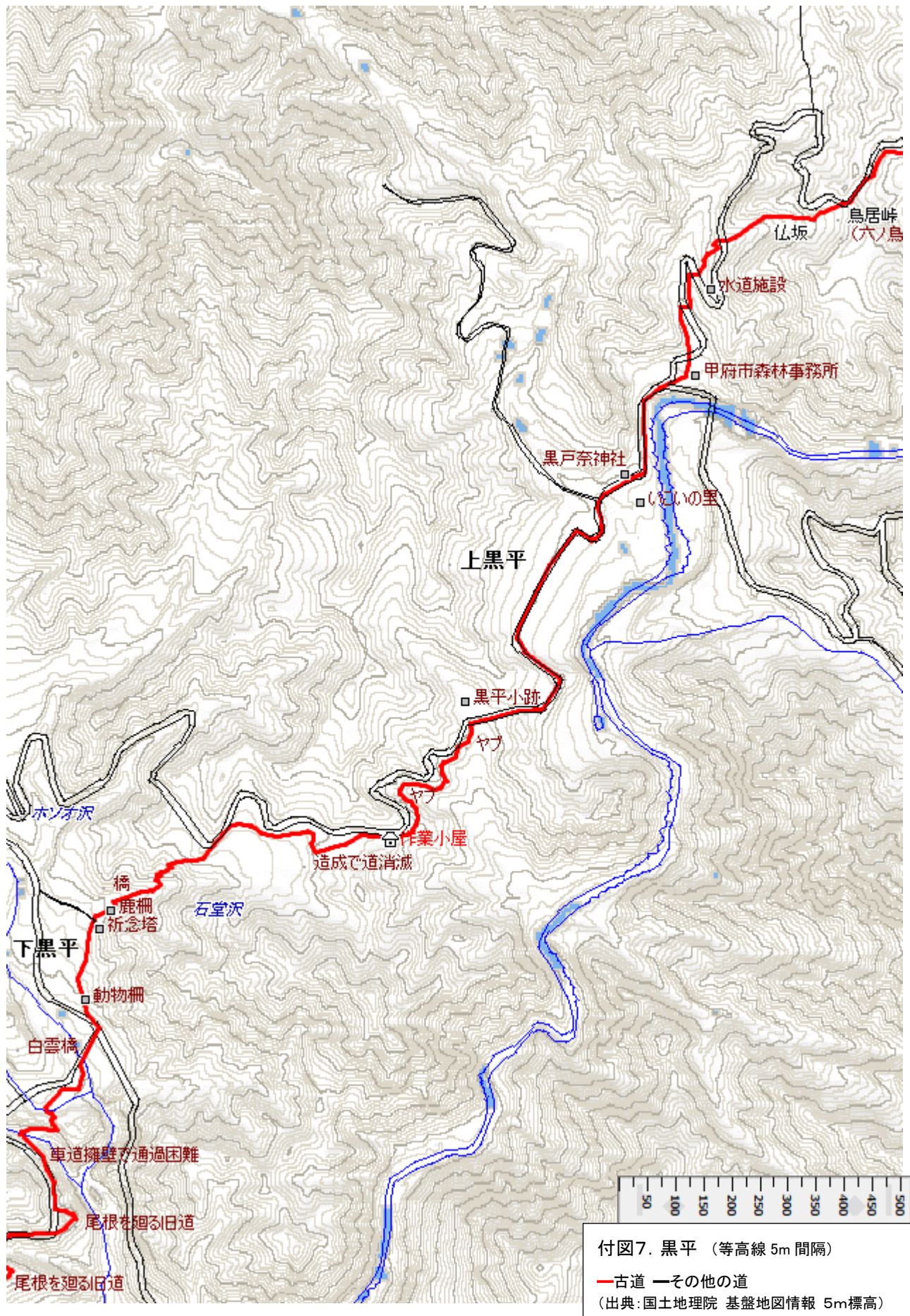


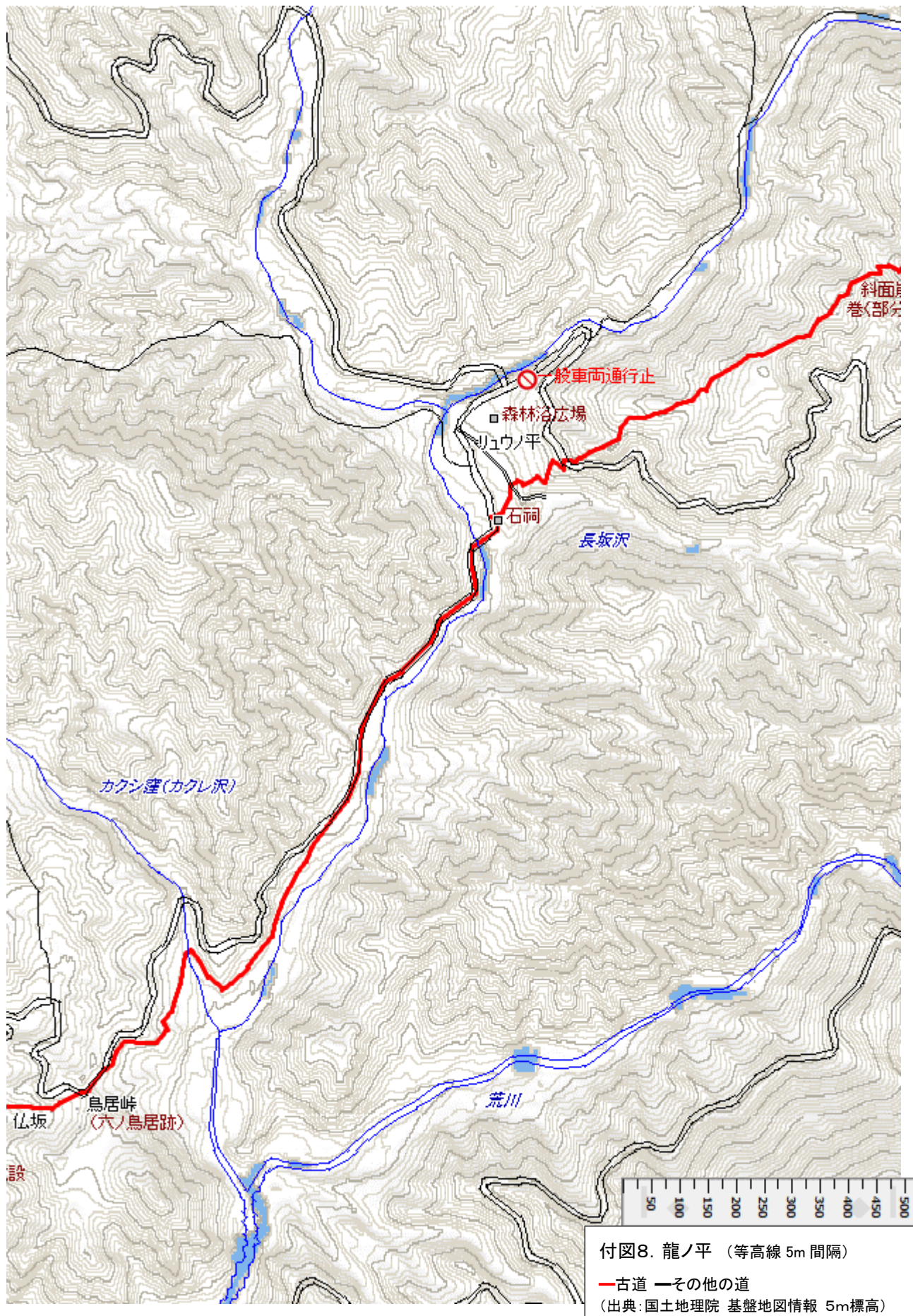


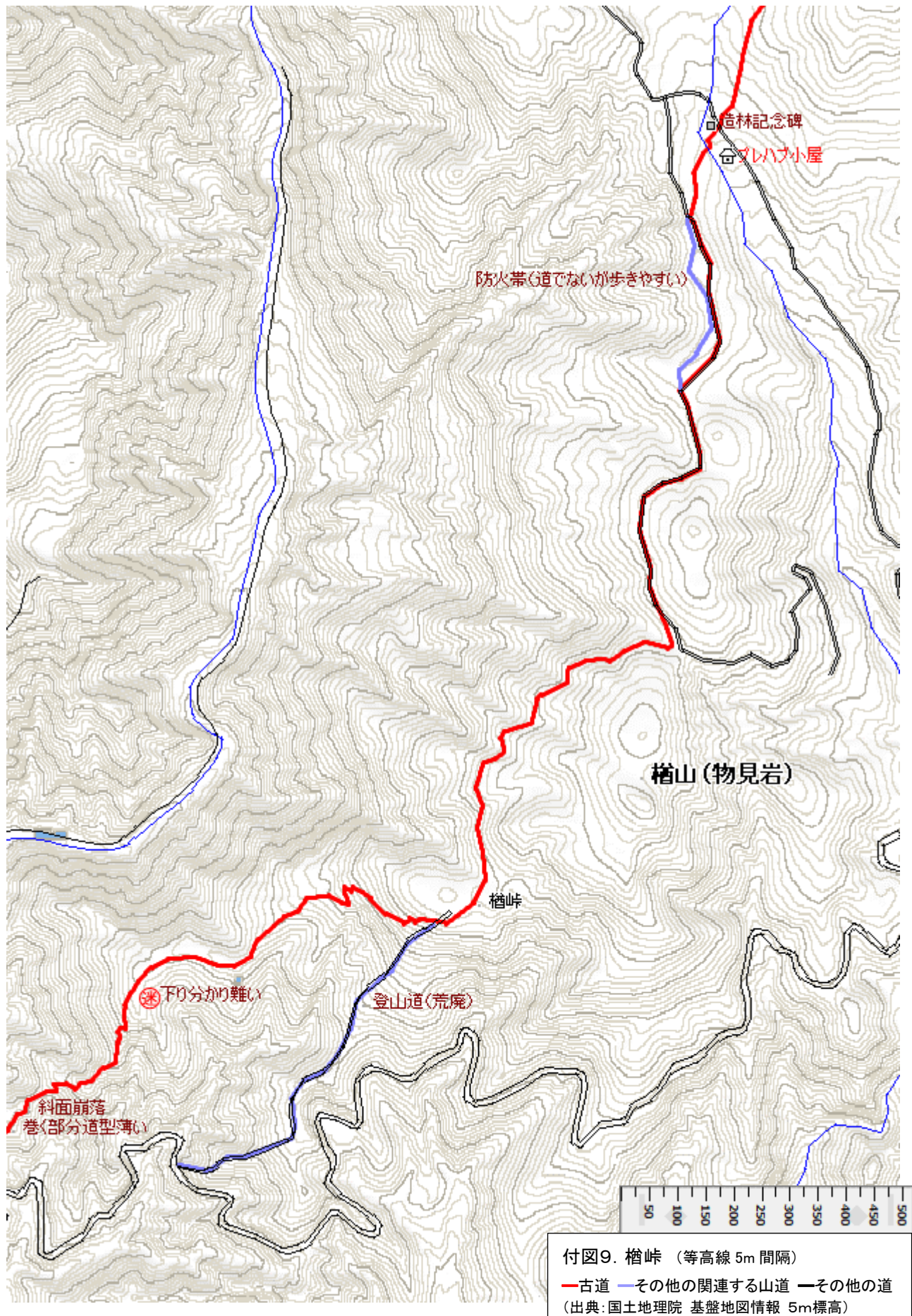


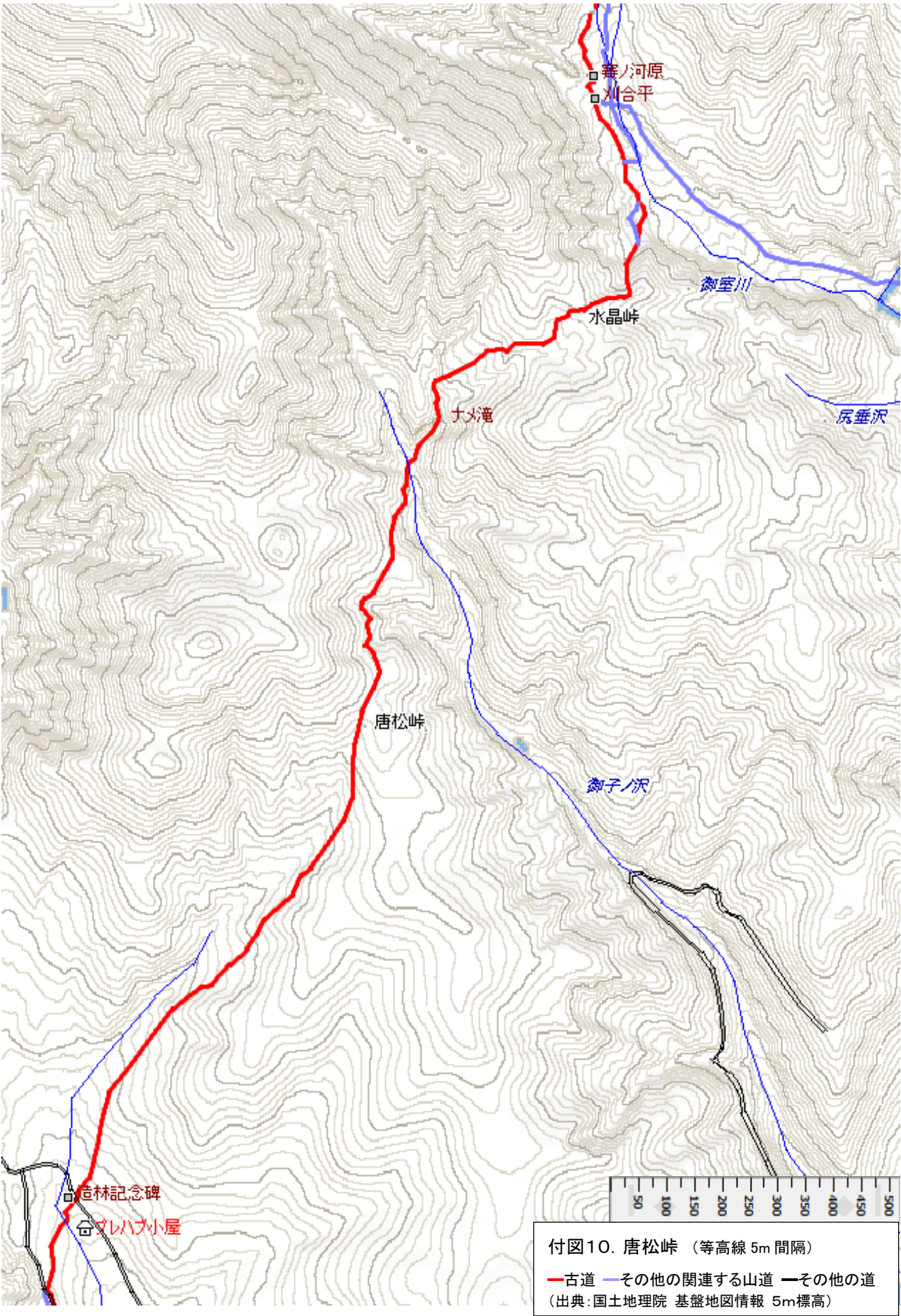


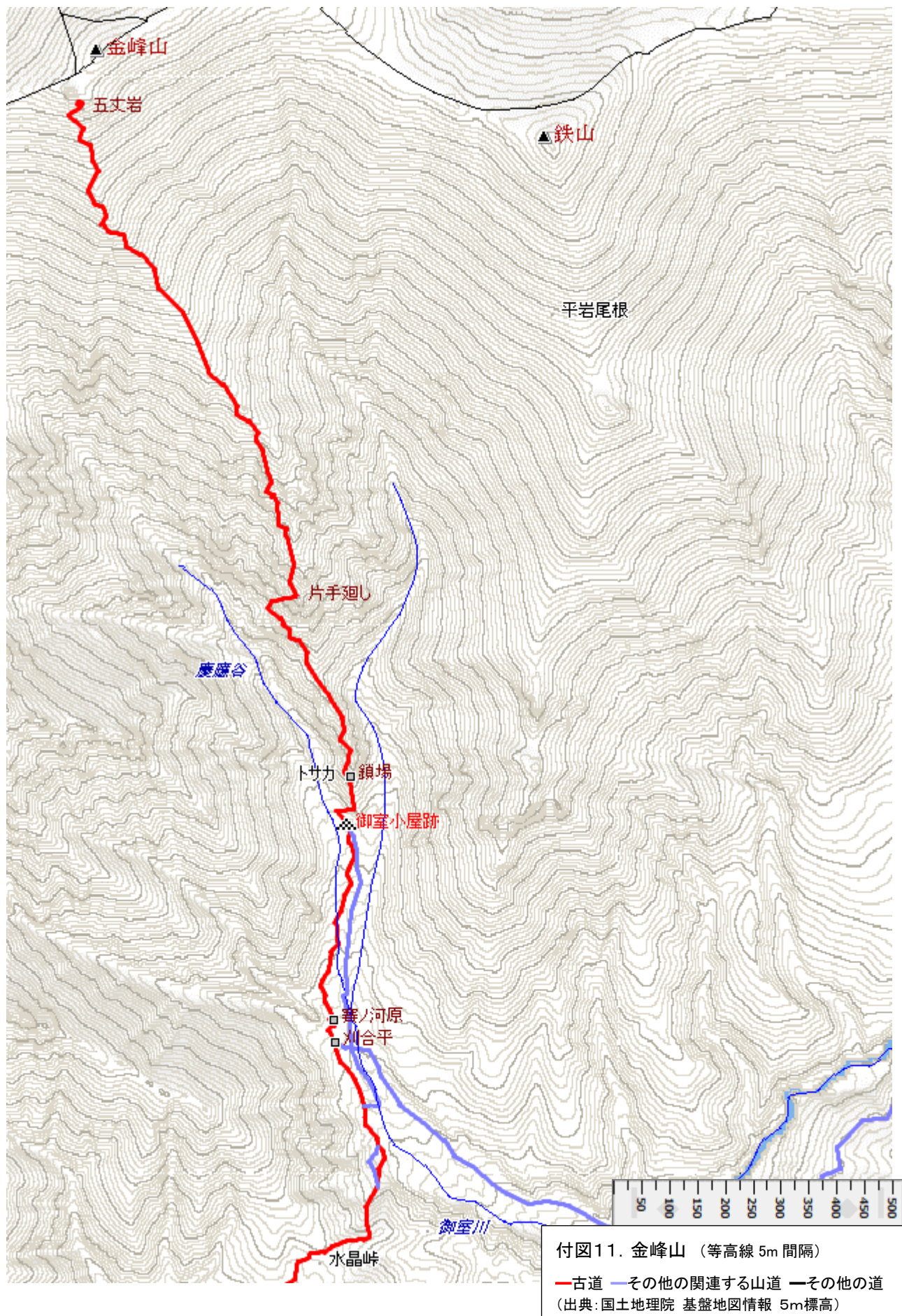








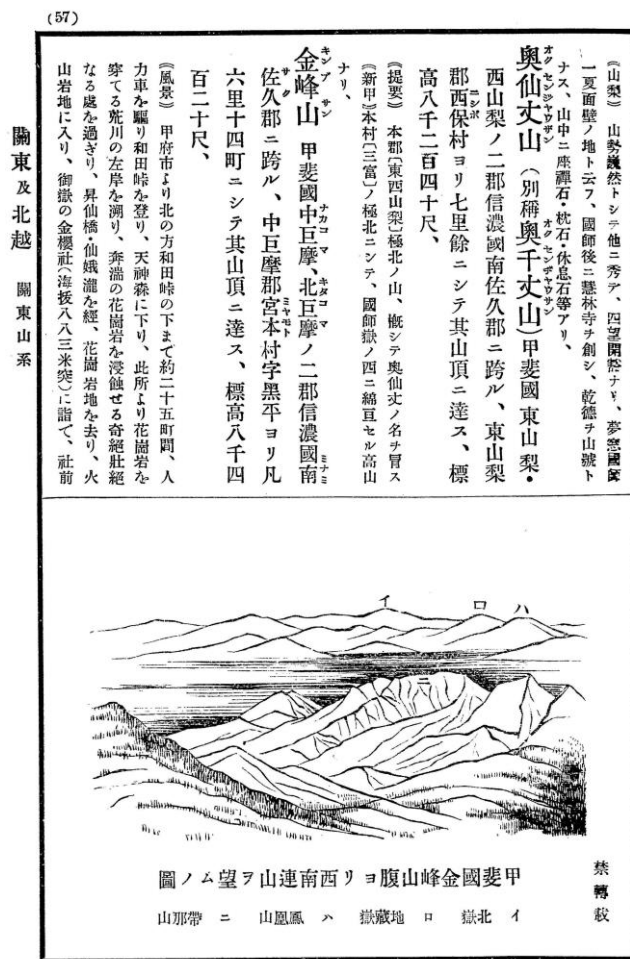




令和三年二月二十八日 著す (同六月二十二日訂)

富永 滋

本著の内容について、間違い、不正確な点、その他お気づきの点がございましたら
ご指摘ください。 (st@medi-terra.net)



日本山嶽志 (高頭 式 編纂) より

AGCレポート vol-73(特別号) 2021年4月10日発行
発行:公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会 気付
TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441
編集担当:近藤 E-mail: yoshi-kondo@jcom.home.ne.